



医療法人財団 倉田会 創立100周年記念誌

# 倉田会100年の歩み

# ともにあゆむ

1957年に自然公園として整備され、平塚市の発展とともに歩んできた湘南平



医療法人財団倉田会が平塚の地に開業して100年。

1923年（大正12年）より、この地に根を張った医療をめざし、  
これまで地域の皆さまとともに歩んできた。



医療法人財団 倉田会 くらた病院  
神奈川県平塚市東真土4-5-26  
TEL:0463-53-1955



昔と変わらぬ美しい夕景を今に残す平塚海岸



写真提供：一般社団法人 平塚市観光協会

1923年の関東大震災、1945年の平塚空襲による街の倒壊と復興。

倉田会は、そうした苦難の歴史にも立ち合い、

苦しみも喜びも分かち合って、ともに発展してきた。



しんど老人保健施設  
神奈川県平塚市東真土4-5-27  
TEL:0463-53-1970



2022年7月、3年ぶりに開催された湘南ひらつか七夕まつり



写真提供：一般社団法人 平塚市観光協会

倉田会は、次の100年、新たな想いをかたちにして、  
関わるすべての人々にとって身近で幸せを提供できる存在として  
皆さまの健康と快適な生活に貢献していく。



えいじんクリニック  
神奈川県平塚市東真土4-5-25  
TEL:0463-53-3211

鎮守の社として平塚市街地を見守る平塚八幡宮



倉田会は、「ともにあゆむ」を理念として、  
これからもずっと、  
倉田会と関わる全ての方々と歴史を歩み続けていく。



倉田会メディカルサポートクリニック 神奈川県平塚市四之宮2-7-8 TEL:0463-27-1001

しんど訪問看護ステーション  
神奈川県平塚市東真土4-4-29  
TEL:0463-53-1980



平塚市高齢者よろず相談センター 倉田会  
(地域包括支援センター)  
神奈川県平塚市東真土4-4-31  
TEL:0463-53-1930

## 「ともにあゆむ」

### 一、患者さまとともに

患者さまとともに、トータルケアを目標として歩みます。

### 一、地域とともに

地域とともに、保健事業（予防）・医業・介護福祉事業を展開し、地域の健康維持と健康増進を目標として歩みます。

### 一、関係者とともに

関係機関への情報提供や、セカンドオピニオンなど患者さまへの利益につながるよう努力して歩みます。

### 一、職員とともに

最良の医療・最良の介護を念頭に、患者さま、ご利用者さまの利益につながるよう検討し、最良のチームを目指して歩みます。

## 倉田会職員から皆さまへのお約束

- 医療を受ける方の権利と意志を尊重し、安心と満足が得られるケアに努めます。
- 医療従事者・介護従事者としての誇りと自覚を持ち、研修や自主研究等を通じて資質向上に取り組みます。
- 医療・介護の質を高め、安全で安心のサービスを提供します。
- 明るく爽やかで患者さまにとって受診しやすく、職員にとっても働きがいのある職場を目指します。
- あらゆる医療ミス・事故の防止への努力を怠りません。



医療法人財団 倉田会  
理事長

## 倉田 康久

医療法人財団 倉田会は、おかげさまで創立100周年を迎えることができました。1923年（大正12年）に、初代 倉田重隆が平塚の地に倉田療院を開業して以来、重久、和久、そして私まで、倉田会は100年にわたり「地域に根を張った医療」にまい進してまいりました。

その100年の歴史をひもとけば、開業時の関東大震災、壊滅的な被害となった平塚大空襲、混乱から立ち上がった戦後復興、度重なる経済不況、東日本大震災などさまざまな危機がありました。現在も新型コロナウイルス感染症との闘いが続いています。そうした数々の困難にあって、倉田会は常に地域の皆さまとともに在り、皆さまの健やかな暮らしを支えるために務めてきました。

私自身も、父 和久亡きあと、理事長に就くことになりましたが、経験豊かなスタッフ一人ひとりに支えられ、患者さま、そのご家族をはじめ地域の皆さまのご厚情をいただいて日々を重ねていくことができました。それができたのも、父、祖父、曾祖父や関わる人々がともに1日1日を積み重ねて、今日の倉田会に繋がっているからだと感じています。

一方で、倉田会は、社会や時代の変化の中で常に何ができるかを考え、結核医療や救急医療、透析医療などに率先して取り組んできました。

そして、父 和久は、1996年（平成8年）に平塚市東真土に新天地を求め、療養型医療から介護・リハビリにわたるトータルケアを志したのです。

現在では、倉田会は、外来、入院透析治療を主とした「くらた病院」、一般・企業健診、婦人科検診を行う「倉田会メディカルサポートクリニック」、最新の外来透析を行う「えいじんクリニック」、在宅復帰を視野に施設での生活を送る「しんど老人保健施設」や在宅療養支援のための「しんど訪問看護ステーション」、平塚市の委託による「平塚市高齢者よろず相談センター 倉田会（地域包括支援センター）」の6事業を通じて、「予防」「医療」「介護」にわたるトータルケアサービスをお届けしています。

これらサービスの基本となる倉田会の理念が「ともにあゆむ」です。

「ともにあゆむ」という理念は、言葉通り関わる人すべてと「ともに」「あゆんでいきたい」という意図がありますが、実際には自分が「あゆんでいる」のではなく、関わる人すべてに「ともに」「あゆんでもらっている」ものなのだ日々実感しています。

「患者さまとともに」「地域とともに」「関係者とともに」「職員とともに」――『人生100年』といわれる超長寿社会において、倉田会は、これからも皆さまの近くで、より頼られる存在を目指してまいります。

次の100年に向けて、1日1日感謝の気持ちを持ちながら努力を重ねていく所存です。皆さまには一層のご支援ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



国務大臣 衆議院議員

## 河野 太郎

医療法人財団倉田会の100周年、誠におめでとうございます。

旧帝国海軍の軍医であった倉田重隆海軍軍医大佐が大正12年に予備役となられ、当時の中郡平塚町に内外科小児科倉田療院を創業されてからの一世紀、倉田会は、平塚のさまざまな人々の健康を守ってこられました。

倉田家と河野家のご縁は、二代目倉田重久先生と私の祖父、河野一郎との付き合いから始まりました。倉田療院の院長をされていた倉田重久先生は昭和19年に軍医として出征され、20年末に復員してこられますが、倉田療院は20年7月の平塚空襲で焼失していました。一方、21年4月の総選挙で第一党となった当時の日本自由党の幹事長を務めていた祖父、河野一郎は、自由党総裁鳩山一郎を首班とする組閣に入るものの突如、GHQの指示で公職追放の憂き目に遭います。河野一郎は、昭和26年6月の講和条約調印を機に追放が解除されましたが、療院の復興に奔走されていた倉田重久先生も、26年9月に倉田療院の上棟式に漕ぎつけられます。そして27年10月の総選挙で衆議院に当選を果たした河野一郎が、その時の選挙事務所で当選を祝っている写真の中に、杯を挙げる倉田重久先生のお姿があります。二人にとっての再出発の時期が図らずも重なったようでした。

また、重久先生の夫人、多喜さんは旧金目村の柳川家より嫁がれ、私の父河野洋平の後援会婦人部の役員を長く務めていただくとともに、私の母、河野武子のよき相談相手にもなって下さいました。私も父の代わりに御挨拶にお伺いしたこともあり、私自身が初めて出馬した時には、お元気に応援していただき、3代にわたってお世話になりました。

倉田会三代目の和久先生は、河野洋平、武子が仲人を務めさせていただきました。和久先生は、湘南西部病院協会の会長や港小学校の校医を務められただけでなく、平塚警察署にも多大な貢献をされ、また、ユニセフの支援なども活発に行われました。平塚市東真土に老健施設や訪問介護ステーション、在宅介護支援センターを開設されるなど、平塚市の医療、介護に多大な貢献をされました。

そして四代目の康久先生が倉田会を引き継がれ、平塚の医療、福祉に貢献されて今日に至り、100周年をお祝いされることになりました。

私も現在、デジタル大臣として、医療のデジタル化にも取り組んでおります。現場で市民の健康を預かる倉田会の皆様が、より活躍しやすい医療環境をデジタルで実現できるように、頑張ってお参ります。

倉田会が、次の100年を目指して、さらに発展されますこと、倉田会で医療、福祉に携わる皆様がさらにご活躍されますことをお祈り申し上げ、お祝いの御挨拶とさせていただきます。



平塚市 市長

## 落合 克宏

### 倉田会100周年を祝して

医療法人財団倉田会が100周年という節目を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

1923年に「内外科小児科 倉田療院」として創立以来、地域医療の発展、住民の健康と福祉の向上に寄与してこられました。貴会の飛躍的な成長を支えてこられた歴代院長、並びに運営に関わってこられた全体的皆様のご功績に深く敬意を表します。

貴会におかれましては、創業当初から地域に根差した医療を展開され、現在は保健事業から医業、介護福祉事業まで、市民の皆さまに寄り添った多岐にわたる事業を続けていらっしゃいます。それらの一つ、平塚市の委託事業として携わっていただいている「平塚市高齢者よろず相談センター 倉田会」も、高齢者福祉施策の充実になくてはならない存在として、重要な役割を担っておられます。

基本理念に掲げられた「ともにあゆむ」という姿勢は、貴会の事業に脈々と受け継がれ、医療や介護を受ける患者さまやご家族の皆さまへのきめ細やかなお心遣いから、窺い知ることができます。これまでの歩みは、決して平坦ではなかったものと拝察いたしますが、最善の医療の提供に向けた、広範でたゆみないご尽力に深く感謝申し上げます。これからも、各方面から寄せられる信頼や期待を活力として、未来に向かってさらなる発展を遂げられるよう願っております。

さて、平塚市は2022年4月1日に、市制施行90周年を迎えました。この節目にあたり、これまで空襲や度重なる自然災害などにも力強く立ち向かい、多様な産業と都市基盤が充実した人口26万のまちを築き上げてきた先人の努力を再確認しました。貴会も平塚市と同じ時を刻み、ともに市民の皆さまの「安心して暮らせる支え合いのまちづくり」に努めてくださり、大変感慨深い気持ちです。

2022年1月1日現在の市内の100歳を越す高齢者数は184人で、平成の初めにわずか一桁台だったことを思うと、「人生100年時代」の長寿社会は確実に到来しつつあります。今後、さらなる人口減少・少子高齢化が急速に進展し、高齢者への支援や治療後のフォローなど、医療の関与が求められる領域はますます広がるばかりです。こうした中、皆さまの素晴らしい力が必要な方々に発揮できるよう、引き続き、お力添えのほどお願いいたします。

結びに、貴会のますますのご発展と、関係者の皆さまのご活躍とご健勝を心からお祈り申し上げます。



公益社団法人神奈川県病院協会  
会長

## 吉田 勝明

### 開院100周年を祝して

医療法人財団倉田会が100周年を迎えられますこと、心よりお祝い申し上げます。貴会のこれまでの偉業について資料を拝読いたしました。

倉田会は「内外科小児科倉田療院」として開業されて以来、地域医療の発展・充実ならびに、医療の向上に積極的に取り組み、市民の健康増進に大きく貢献されてきました。このことは、歴代の院長をはじめ貴会関係者の皆さまの永きにわたるご尽力の賜と深く敬意を表します。

3代目病院長の倉田和久先生には、神奈川県病院協会の理事、常任理事として11年間という永きにわたりご尽力をいただきました。

更にこの間、湘南西部病院協会の会長職を歴任され、神奈川県病院協会との連携を深めていただきましたこと、この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

さて、この1世紀の間、度重なる経済の低迷や災害など、幾多の試練を課せられ、その都度、乗り越えられた貴会の100年の歴史は「ともにあゆむ」の理念に基づくものであらうと拝察致します。

近年、医療制度の改革、慢性的な医師・看護師の不足、加えて消費税増税や物価高騰による経営圧迫等、医療を取り巻く環境は大変厳しい状況であります。

このように多くの課題が山積する中、COVID-19に世界中が大きく動かされています。2020年1月、神奈川県で我が国初めての新型コロナウイルス感染症の患者が判明し、さらにダイヤモンド・プリンセス号を契機に、神奈川DMATによる救急搬送と受け入れ病院の先生方の奮闘が始まりました。

その後、市中感染が広がり、第8波まで、あっという間でしたが、未だ出口が見えない状況の中、貴会をはじめとする多くの病院が、この局面を乗り越えようと、ご苦労されています。

そのような中、適切な医療・安全で安心な暮らしの確保は、国民の切実な要請であり、地域の医療需要にどのように対応していくかは大きな課題として、我々はその使命を果たすべく努力を重ねる必要があると考えます。

私ども神奈川県病院協会は、これまで以上に、貴会をはじめ県内に所在する病院及び関係団体の皆さまと連携・協力して国民・県民の要請に応えられるよう、安全で質の高い医療の提供に努力して参ります。

貴会におかれましては、開院以来、地域のめざましい発展とともに歩み続けてこられた100年の歴史の重みを糧とされまして、「予防」から「医療」「介護」までトータルケアサービスの提供を、より一層取り組まれますことにご期待申し上げます。

結びになりますが、医療法人財団倉田会の更なる発展と、関係者の皆さまのご活躍を祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。



一般社団法人 平塚市医師会  
会長

## 久保田 亘

### 医療法人財団倉田会100周年に寄せて

医療法人財団倉田会が創設100周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

創設以来、理事長、院長をはじめ諸関係職員の皆様のご努力により今日まで地域医療を担う重要な責務を果たされたことに対して、敬意を表するとともに感謝を申し上げます。

医療法人財団倉田会は1923年(大正12年)に「倉田療院」として平塚市明石町に開設されました。その年に関東大震災、1945年(昭和20年)には第二次世界大戦による平塚大空襲を経験されましたが、戦後の平塚市の目覚ましい復興とともに、1953年(昭和28年)に「倉田病院」と名称変更し、現在まで100年の歳月を重ねられました。平塚市医師会は1947年(昭和22年)の開設以来、現在75周年を迎えましたが、戦後から倉田病院はわれわれ平塚市医師会と共に平塚市の地域医療を担い保健・公衆衛生と地域医療の向上に尽くされています。

近年、日本の医療は社会の人口構造の変化により少子高齢化が進み、国による老人福祉・老人医療政策も大きく変化しました。1989年(平成元年)にゴールドプラン(高齢者保健福祉推進十か年戦略)が策定され施設整備と在宅福祉の推進が図られました。更に高齢者の介護を社会全体で支え合う仕組みの介護保険法が1997年(平成9年)に成立し、2000年(平成12年)に施行されました。

倉田会はこのような時代の変化に先駆けて、1996年(平成8年)から平塚市東真土に老人保健施設や訪問看護ステーションを開設、更に1999年(平成11年)には急性期病床から療養型病床に転換した「くらた病院」の移転開設、2001年(平成13年)の在宅介護支援センター開設を経て、2006年(平成18年)には地域包括支援センターを開設されました。このように高齢者の自立、介護予防、生活支援に向けて取り組むと共に透析医療や健診センター事業を行い幅広く地域の医療に携わり、わが国の少子高齢化に対応した医療・介護・福祉の役割を中心的に担っておられます。また、湘南西部病院協会が行っている「医療・介護の情報ネットワーク(medical B.I.G. net)」にも参加し、平塚市医師会と共に平塚市や近隣地域の医療と介護の連携に協力いただいているところです。

国は超高齢社会を踏まえ地域包括ケアシステムの構築を図っています。

今後とも倉田会には平塚市においてその中心的な役割を担うとともに、平塚市医師会員として平塚市の地域医療の向上に尽力していただきたいと願っております。

最後に、理事長、院長をはじめ病院関係者の皆様のご健勝と倉田会の益々の発展をご祈念し、お祝いの言葉といたします。



■ 巻頭口絵 ともにあゆむ	2
■ 発刊のごあいさつ 医療法人財団 倉田会 理事長 倉田 康久	11
■ ご祝辞	
国務大臣 衆議院議員 河野 太郎	12
平塚市 市長 落合 克宏	13
公益社団法人 神奈川県病院協会 会長 吉田 勝明	14
一般社団法人 平塚市医師会 会長 久保田 亘	15
■ 第1章 100年の軌跡 1923-2023 (大正12年-令和5年)	17
創業期 1923-1945 (大正12年-昭和20年)	18
病院復興 1946-1960 (昭和21年-35年)	22
成長発展 1961-1973 (昭和36年-48年)	25
高度医療 1974-1990 (昭和49年-平成2年)	29
療養型医療 1991-2001 (平成3年-13年)	32
躍進期 2002-2023 (平成14年-令和5年)	36
■ 第2章 施設のご紹介	41
くらた病院	42
しんど老人保健施設	48
えいじんクリニック	54
倉田会メディカルサポートクリニック	60
しんど訪問看護ステーション	64
平塚市高齢者よろず相談センター 倉田会 (地域包括支援センター)	66
創立100周年記念 コラム① 倉田会ロゴマーク選定総選挙を開催	68
■ 第3章 アルバム2023 職員とともに	69
創立100周年記念 コラム② 医療法人財団 倉田会 広報誌 ともにあゆむ	80
■ 倉田会の歩み 年表	82
■ 編集後記	84

# 第1章 100年の軌跡

## 1923-2023 (大正12年-令和5年)

## 倉田療院の創立、震災の試練を越えて

医療法人財団 倉田会は、1923年(大正12年)に倉田重隆が創立した倉田療院に始まる。

倉田療院は、開設時に関東大震災に見舞われるなど幾多の試練を乗り越えて、かけがえのない地域の医療機関として役割を全うしてきた。

### ■ 海軍軍医の実績のもと平塚に開業

倉田療院を創立した倉田重隆は、1875年(明治8年)に長野県に生まれ、東京慈恵医院医学校(現・東京慈恵会医科大学)に学んだ。1899年(明治32年)に東京築地外科林病院を経て、海軍軍医候補生として海軍軍医学校に入学し内科・外科の専門技術を修得する。1901年に海軍軍医少尉として広島県の呉海軍病院に赴任した。日露戦争(1904～05年)が勃発すると、戦闘

艦富士や駆逐艦などの船医を務め、この功により金鷄勲章を受けている。

日露戦争後は、呉、舞鶴(京都)、佐世保(長崎)の海軍病院などの内科・外科医師を20有余年にわたって務め、海軍軍医大佐にまで累進した。この間に米国への出張を経験し、海軍軍医学校の研究生として「発作性色素尿患者の血液の溶血現象の研究」「血液内酵素抗『トリプシン』作用のがん診断における価値につい

ての研究」などの成果をあげ、海軍軍医会誌にとどまらず海外の専門誌にも研究論文を発表している。

重隆は、1919年(大正8年)に神奈川県中郡平塚町(現・平塚市)に開設された海軍火薬廠の医務部長となり、併せて海軍共済組合平塚診療所(現・平塚共済病院)の初代院長として職員と家族の診療にあたっている。

1920年に平塚診療所院長を退任後、旅順要港部海軍病院長を経て、重隆は平塚での病院開設を決意。1923年(大正12年)に平塚町新宿(現・明石町)に倉田療院を創立した。当初の診療科目は、内科、外科、小児科の3科であった。

### ■ 関東大震災の負傷者を救護・治療

1923年9月1日、創立間もない倉田療院に大きな試練が訪れた。

午前11時58分、相模湾を震源とするマグニチュード7.9の巨大地震が発生し、東京・神奈川を中心に死者・行方不明者が10万人を超える大惨事をもたらした。関東大震災である。相模湾に面する平塚町も、津波と地震動により死者476名、家屋全壊4,192戸を数えた。

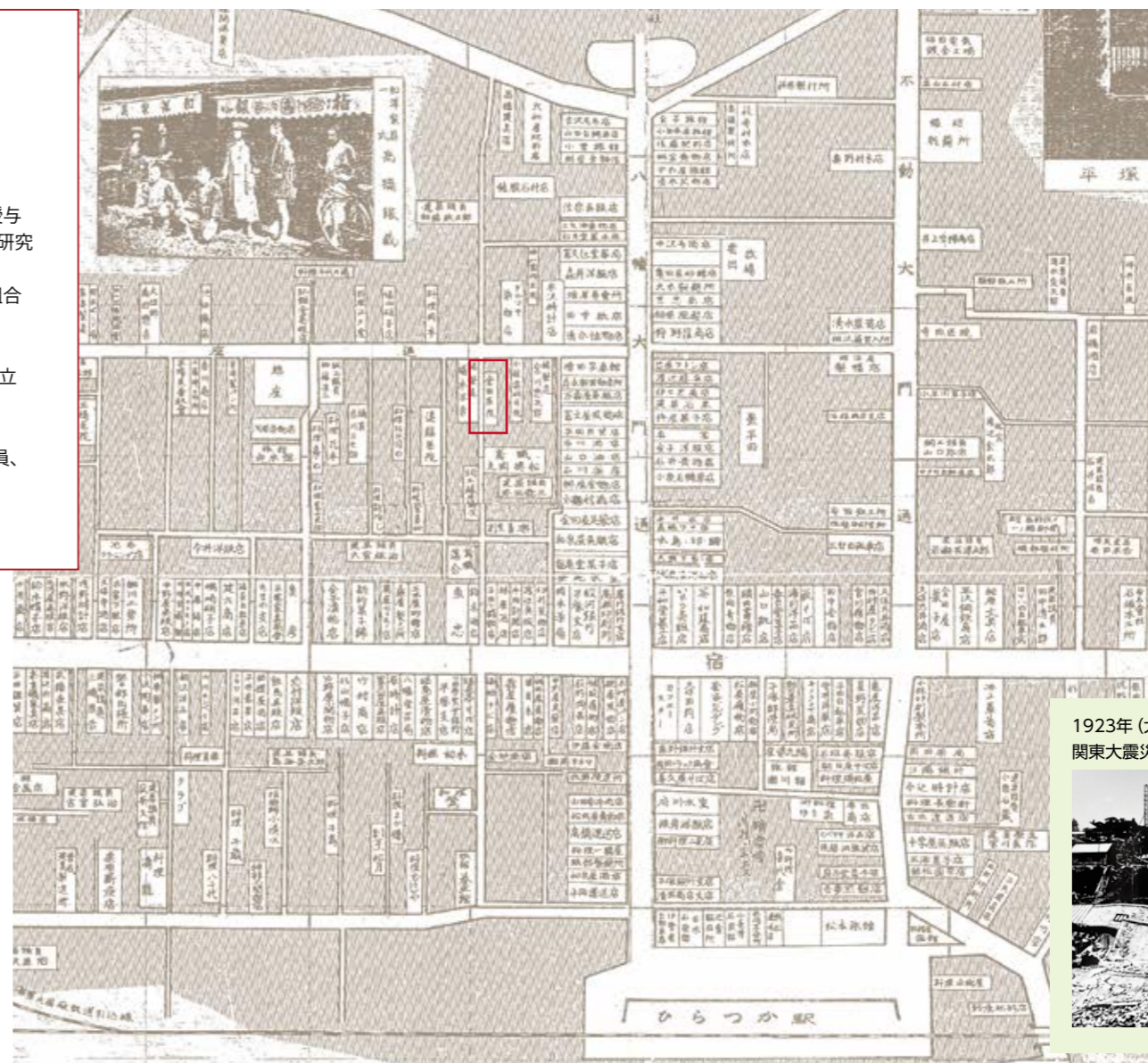
この大震災における倉田療院の被災状況は記録されていないが、震災直後の平塚中心部の惨状を伝える写真が残っており、倉田療院も甚大な被害を受けたと推測される。そうした混乱の中であって、重隆院長が日露戦役で多くの傷病者を治療してきた経験にもとづ



▲初代院長 倉田重隆(くらた しげたか)

#### 経歴

- 1875年(明治8年) 長野県に生まれる
- 1899年(明治32年) 東京慈恵医院医学校(現・東京慈恵会医科大学)卒業  
東京築地外科林病院勤務
- 1900年(明治33年) 海軍軍医候補生、海軍軍医学校乙種学生被命
- 1901年(明治34年) 海軍軍医少尉任官、呉海軍病院に赴任  
日露戦争で戦闘艦富士などの船医、この功により金鷄勲章授与  
各地の海軍病院に勤め、米国出張、海軍軍医学校にて内科学研究  
などにも従事
- 1919年(大正8年) 平塚に創設された海軍火薬廠の医務部長に就き、海軍共済組合  
平塚診療所初代院長を併任
- 1920年(大正9年) 旅順要港部海軍病院長に就任 海軍軍医大佐
- 1923年(大正12年) 海軍予備役となり、平塚町新宿(現・明石町)に倉田療院を創立  
宮内省叙勲 正五位授与
- 1933年(昭和8年) 倉田療院創立10周年  
中郡平塚連合医師会(現・平塚市医師会)の役員、理事、評議員、  
神奈川県医師会議員を歴任
- 1940年(昭和15年) 死去。享年66歳



◀1925年(大正14年)の平塚地図

八幡大門通りに並行した通りに「倉田医院」と記されている

▼1923年(大正12年)宮内省より正五位に叙される

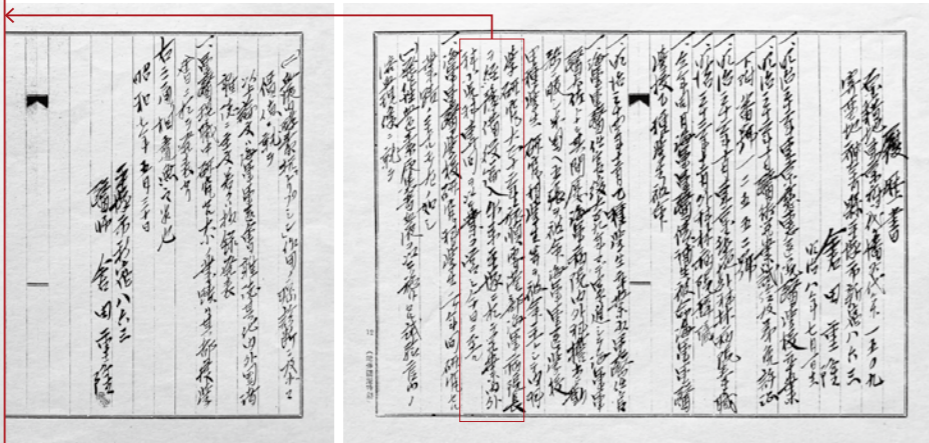


1923年(大正12年)9月1日  
関東大震災で被害を受けた平塚の家屋



平塚市博物館

倉田重隆の履歴書 「大正12年に平塚に於いて開業」と記されている▼



學研究 大正十二年旅順要港部海軍病院長  
ヲ経縁備役編入 出来平塚ニ於テ開業内外  
科小兒科専門ヲ以テ業ヲ営ン今日ニ至ル

いて負傷者の救護・治療に献身的に取り組んだことは想像に難くない。

### ■ 創立10周年を迎えた倉田療院

関東大震災前後から昭和初期にかけて、銀行の取りつけ騒ぎや企業の倒産などが相次ぐ大不況を迎えていた。しかし、東海道五十三次の宿場町として賑わってきた平塚は、海軍関連の研究所や工場が設置されたことで発展を続け、1932年(昭和7年)に横浜、横須賀、川崎に次いで神奈川県で4番目に市制を敷いた。

翌1933年に創立10周年を迎えた倉田療院は、『創立10周年記念誌』を発行。その巻頭で、重隆院長は次のように挨拶している。

顧みれば湘南の地平塚にいささかの医院を開設して、十年の星霜を経ました。変わらざる御愛顧と御援助をこうむり業務も日に月に盛大となり、従来の家屋ではすこぶる不便と狭隘とを感じ、増築かつ諸設備を改善するは平素の御支持に報いる重責であると自覚して決行しました。

近き将来、総合病院建設の礎石を据え得るに至りました事は各位御愛顧の賜であると深く感謝する次第です。

記念誌には、竣工した新療院の外観、重隆院長を囲む医師や看護婦(看護師)などの写真が掲載され、当

時の活気に満ちた療院の雰囲気を与えている。

診療科目も、内科、外科、小児科に物療科が加わった。物療科には、最先端医療設備のX線撮影装置が導入され、一般診療だけでなく、結核の早期発見、治療でも大きな役割を果たした。

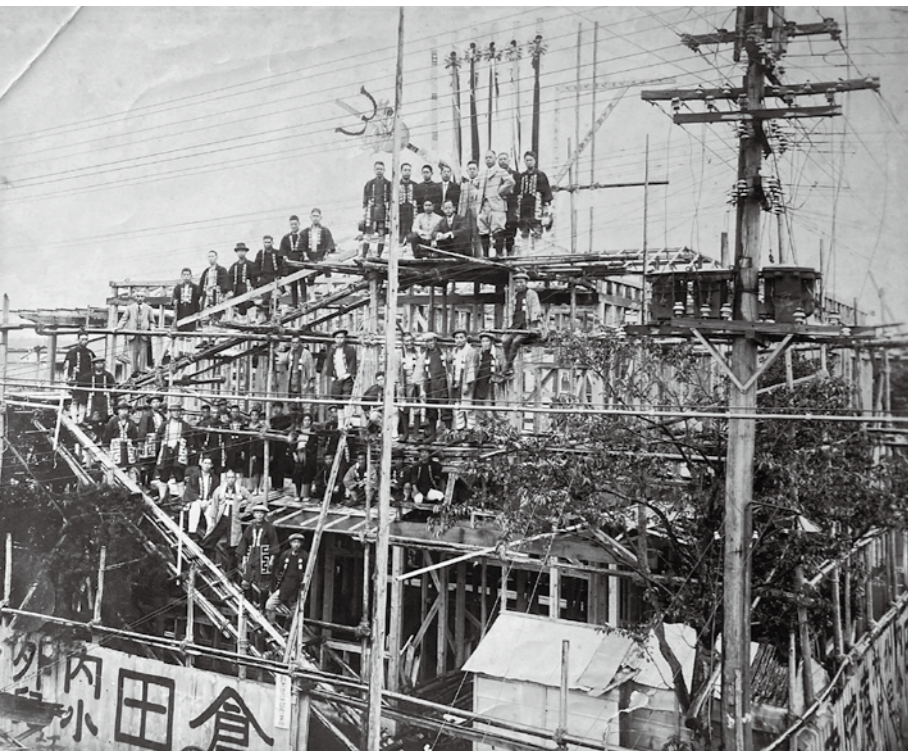
倉田療院は、その後も平塚市民の健康を支えて順調に発展してきたが、1940年、重隆院長は志半ばにして病に斃れた。享年66歳であった。

倉田重隆には、海軍退任時に従五位勲三等功五級から正五位に叙されている。また、中郡平塚連合医師会(現・平塚市医師会)の役員、理事、評議員を長く務め、神奈川県医師会議員に任じられるなど、地域医療の振興においても多大な功績を残した。

### ■ 平塚空襲で全焼した倉田療院

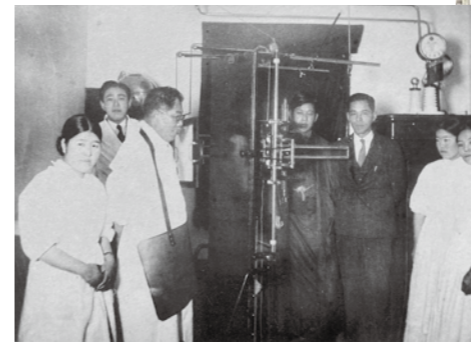
第2代院長に就任したのは、長男の倉田重久である。重久院長は、重隆と同じく東京慈恵医院医学校に学び、1938年より倉田療院の副院長に就いていた。

しかし、院長就任翌年の1941年に太平洋戦争が勃発し、重久院長も軍医として出征することとなった。1944年に入ると本土空襲が頻発するようになり、海軍施設だけでなく、戦闘機「疾風」の製造で知られる日本航空工業(現・日産車体)などの軍需工場が集まっていた平塚も標的となった。1945年7月16日の平塚空襲により、倉田療院は全焼した。

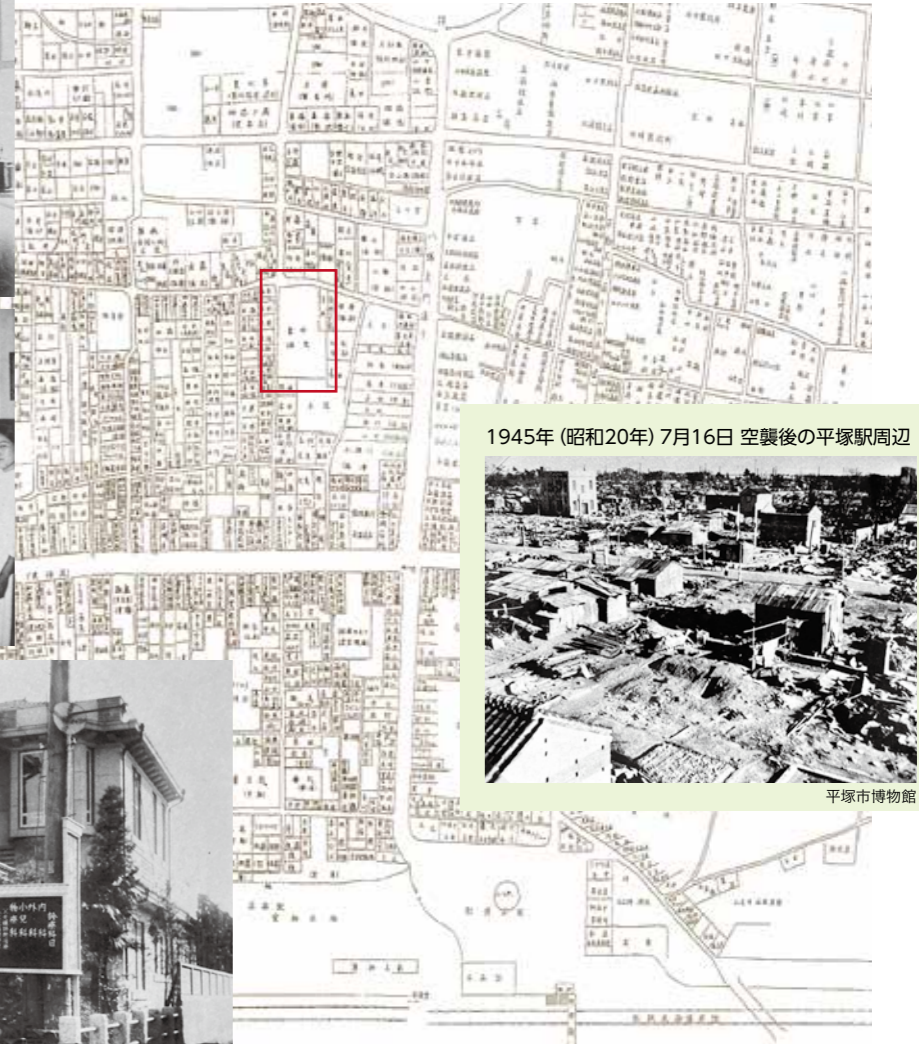


◀ 倉田療院 上棟式 (1932年)

▼ 倉田療院 創立10周年記念誌 (1933年)  
新しい倉田療院の外観や院内など7枚の写真が掲載されている。



▼ 1942年(昭和17年)の平塚地図 倉田療院の敷地が拡幅されている



1945年(昭和20年)7月16日 空襲後の平塚駅周辺

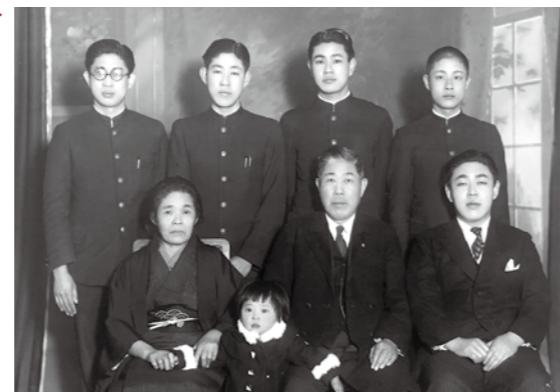
平塚市博物館

1932年(昭和7年)4月1日 市制施行  
(写真は平塚市役所)



平塚市博物館

▶ 重隆院長と家族写真



# 病院復興 1946-1960 昭和21年-35年

## 本館を再建、医療法人財団 倉田会を設立

重久院長は終戦翌年に診療所を開設し、戦災を受けた平塚市民に対し分け隔てなく診療を行った。1951年には、戦前を上回る規模の療院本館を再建し、一般診療だけでなく、結核治療や救急治療にも力を注いだ。

### ■ 戦後すぐに診療を再開

1945年(昭和20年)8月15日、太平洋戦争が終わった。倉田重久院長は、終戦の年の暮れに復員し、平塚の街に戻ってきた。市街地の7割が焼け野原となり、掘っ建て小屋で暮らす人々は食べ物さえ満足に得られず寒さの中で震えていた。栄養失調や病気や怪我のために身動きできない人も数知れずいた。

この悲惨な光景を目の当たりにした重久院長は、年

が明けると、被災を免れた新宿(現・立野町)の自宅を改装してささやかな診療所を設けた。しかし、診療を行うための医療材料や医薬品も満足に入手できなかった。そこで、慈恵医大の関係者や神奈川県医師会をはじめあらゆる伝手を使って何とかかき集めた。

その一方で、病院の焼け跡を少しずつ片づけて、3月にはバラック建てながら手術もできる診療所の開設にこぎつけた。待望の倉田療院の再開を知り人々が殺到

したが、戦後の混乱の中でその日暮らしの患者ばかりで診療代や薬代が払えない人も多くいた。重久院長は、そうした患者にも分け隔てなく診療を行い、病院に来られない患者宅へも気軽に往診して回った。

1947年7月には、戦後復活した平塚市医師会で副会長に選出されている。

### ■ 本館再建が成り、結核撲滅に貢献

1951年にサンフランシスコ講和条約が結ばれ、日本はようやく戦後の混乱から立ち直りつつあった。それを祝うかのように、この年、「第一回平塚七夕まつり」が開催されている。

倉田療院では、9月に本館の上棟式を行い、新たな

一步を踏み出した。重久院長は、外科手術に長け、とりわけ盲腸手術の評判が高く、新装された病院に多くの患者がやってきた。

1953年12月には、医療法改正を受けて「医療法人財団 倉田会」を設立し、病院名を「倉田病院」に改称した。

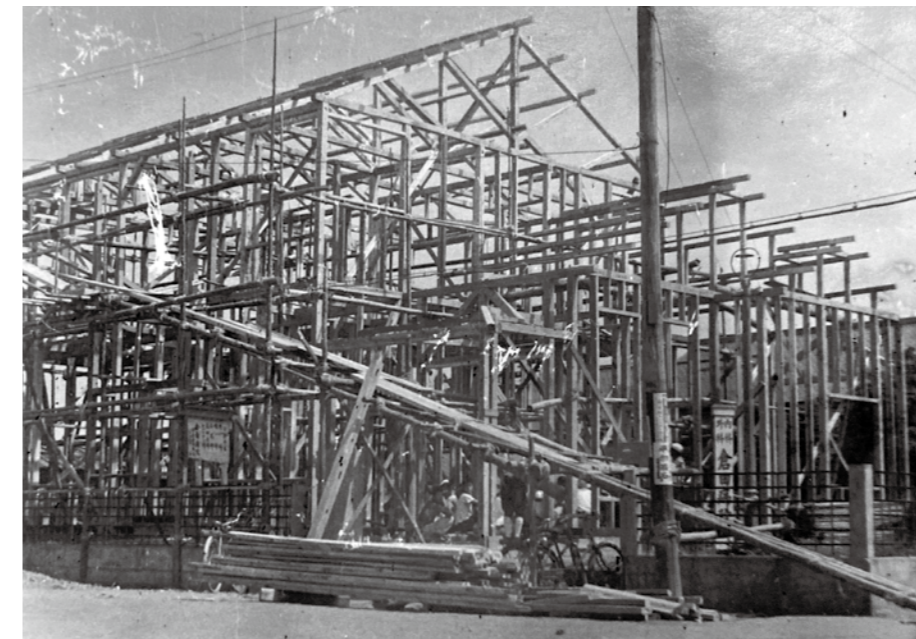
1954年8月には、病院の伝染病棟の一部を結核病棟に用途変更している。それまで、「死の病」として怖れられてきた結核は、1943年にワクスマンによって発見された抗生物質ストレプトマイシンにより、「治る病」になった。戦後、日本にも結核の特効薬として輸入されるようになったが、ストレプトマイシンは極めて高価なため、入手が困難であった。そこで、1950年から科学研



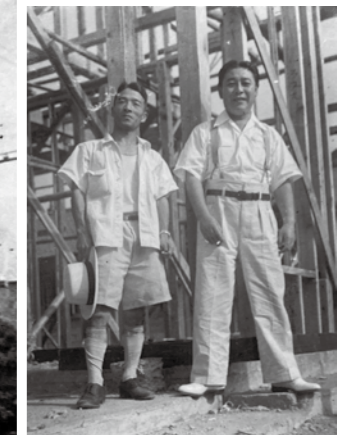
**経歴**

- 1908年(明治41年) 広島県呉市に生まれる
- 1934年(昭和9年) 東京慈恵会附属医学校(現・東京慈恵会医科大学)卒業  
東京慈恵会附属東京病院にて研究
- 1938年(昭和13年) 倉田療院副院長に就任
- 1940年(昭和15年) 倉田療院第2代院長に就任
- 1944年(昭和19年) 軍医として招集・出征
- 1945年(昭和20年) 12月に復員
- 1946年(昭和21年) 診療再開、倉田療院再建
- 1947年(昭和22年) 平塚市医師会副会長に就任
- 1951年(昭和26年) 倉田療院本館上棟式
- 1953年(昭和28年) 「医療法人財団 倉田会」設立、理事長就任。「倉田病院」に改称
- 1954年(昭和29年) 結核病棟開設
- 1960年(昭和35年) 平塚市第6代消防団長に就任
- 1963年(昭和38年) 健康診断業務開始。救急告示医療機関となる
- 1967年(昭和42年) 新築拡張工事完了。企業健康診断開始。神奈川県医師会理事に就任
- 1971年(昭和46年) クモ膜下出血で倒れる
- 1977年(昭和52年) 勲五等双光旭日章を授与される
- 1979年(昭和54年) 死去。享年71歳

▲ 2代目院長 倉田重久(くらた しげひさ)



◀ 1951年9月4日 本館上棟式



▼ 1952年10月 総選挙で衆議院議員に当選を果たした河野一郎氏を祝う重久院長(後列左中央)



1945年ごろ 若き頃の倉田重久 ▶



1950年(昭和25年)3月1日  
湘南電車が登場(写真は1962年)



1951年(昭和26年)7月4日  
第一回平塚七夕まつり



平塚市博物館

究所(現・理化学研究所)で国産化の研究が進められ、1951年秋より生産が始まり、安価なストレプトマイシンの供給を開始している。

重久院長は、ストレプトマイシン国産化の動きにいち早く注目し、結核撲滅を志したと思われる。

### ■ 消防団長として活躍

昭和30年代に入ると、重久院長は、モータリゼーションの弊害である交通事故の多発を憂えて、救急医療に力を注ぐことにした。救急患者の診断・治療には優秀な放射線技師が必要となる。そんな折、群馬大学医学部附属病院の教授の紹介で倉田病院を訪れたのが、診療放射線技師の友重恵司氏(後に竹内恵司氏)だった。

重久院長は、友重氏の優れた技量を見抜き、その場で放射線技師となることを要請した。友重氏は患者のX線撮影だけでなく、午後の往診時には運転手も務めたという。その後、友重氏は平塚の葬儀会社サカエヤの先代社長に見込まれて竹内家に入り今日のサン・ライフグループを築き上げることになった。そして、今日まで長年にわたり倉田会の理事を務めていただいている。

重久院長は、地域の消防団活動にも力を入れ、1960年に平塚市第6代消防団長に就任し、その後10年余にわたり重責を務めた。この功により、1977年に勲五等双光旭日章が授与された。

### 重久院長の飾らない人間味に惹かれて

私は診療放射線技師として群馬大学医学部附属病院に勤めていましたが、1959年(昭和34年)に戸部教授の紹介で倉田病院を訪ねました。実は、この時、川崎市立病院の放射線技師長に内定していたので、お断りの挨拶をするつもりでした。ところが、倉田重久院長との面接の最中に救急車が飛び込んできたためX線撮影を手伝うことになりました。一通りの処置が済んだあと、重久院長から「いつから来てくれる」「給料はいくらならいいですか」などと立て続けに聞かれて困ったことを覚えています。最終的には、院長の飾らない人間味に惹かれて倉田病院に入ることに決めました。

私は院長車の車庫の2階に住み、午前は診断にあたり、午後は市内の地理を知るために高級な院長車を運転して平塚一円を往診して回りました。企業健診も思い出深い事業です。レントゲン車を購入し工場の体育館などで実施しましたが、人手が必要なので群馬大時代の人脈を使って放射線技師の研修生を応援として集めました。当時、院長も私も、地域の医療を支えているという自負と気概にあふれていました。



竹内 恵司  
株式会社サン・ライフホールディング 名誉会長  
医療法人財団 倉田会 理事

## いち早く健康診断と救急医療を開始

倉田病院では、健康維持と予防のために、1963年から健康診断業務を開始し、いち早くレントゲン車を導入して、平塚地域の有力工場などに対する企業健診でも大きな実績をあげた。平塚市消防団長でもあった倉田重久院長は、救急治療にも積極的に取り組んだ。

### ■ 健康診断業務開始、救急告示医療機関に

倉田病院では、1963年(昭和38年)4月から健康診断業務を開始した。

この年の8月には、厚生省(現・厚生労働省)の「救急病院等を定める省令」に基づいて、知事が認定・告示する救急告示医療機関となった。

時代は高度成長の真ただ中で、1964年の東京オリンピック開催、東海道新幹線開通に続き、東名高速道路、

小田原厚木道路の開通、霞が関ビルなど超高層ビルの建設などのインフラづくりが進んでいた。平塚市は、首都圏整備法に基づく市街地開発と工場誘致を積極的に進めたことで10万人都市に発展していた。

倉田病院でも、1967年に新築拡張工事が完了し、救急医療をはじめかかりつけ医として、内科、外科、小児科、胃腸科、整形外科、放射線科を有し、急性期医療の役割を果たすまでになった。



▲1965年ごろ 長野県伊那にて



▲1965年ごろ 茅ヶ崎の今宿バス停看板

▼1965年ごろ 倉田病院



この年、倉田病院は企業健康診断を開始した。1960年代に入ると高度経済成長に伴って労働災害も急増していた。そこで、労働省(現・厚生労働省)は労働安全衛生法の整備の一環として、各企業に対し医師による健康診断の義務化を検討していた。この動きに先んじて、倉田病院はレントゲン車を導入し、日産車体、横浜ゴム、古河電工、三菱樹脂などへの出張健診を開始した。民間病院が企業健診に取り組むのは、平塚市はもとより湘南地区でもほとんど例がなかった。さらに、竹内氏によると、倉田病院ではX線を使った放射線治療や、X線による乳製品の品質検査なども試みたという。

1967年、重久院長は神奈川県医師会理事に就任している。

### ■ 創立50周年目前に重久院長倒れる

1971年(昭和46年)7月、創立50周年を前にして倉田重久院長が自宅で倒れた。クモ膜下出血であった。

直ちに倉田病院の医師たちにより救命治療が行われたが、院長の生命維持には人工呼吸器が必要だった。そこで、急報を受けたいわしや西方医科器械の西方晃氏が東京のメーカーに発注し、自ら平塚に運び込んだ。重久院長は、この人工呼吸器によって一命をとりとめた。しかし、病状は回復せず、1974年に長男・和久が第3代院長に就いた。

### ■ 重久院長の志を地域医療に

重久院長は5人の子供に恵まれ、長女の喜久江、長

男の和久、次男の達明、三男の隆がともに医師となり、次女の知子も後に「しんど老人保健施設」の設立・運営で重要な役割を担うことになる。

倉田病院は長男の和久が継ぎ、次男達明は倉田病院に勤務して兄を支えた後、平塚市南金目に倉田クリニックを開業している。三男の倉田隆も中郡二宮町で百合が丘クリニックを開業し、長女喜久江は、綾瀬市に共々岡診療所を開業している。それぞれが地域医療で活躍してきたわけだが、まさに、重久院長の最大の遺産であったといえよう。

▼1977年(昭和52年) 総理府より 勲五等双光旭日章を受ける



▲1967年 倉田病院新築拡張工事落成式



▲1967年ごろ 2代目院長と



▲1968年ごろの受付



▲1969年ごろの診察室

### 七夕まつりの夜に倒れた重久院長

当社は父の代から平塚に「いわしや」を構え、倉田病院にも医療材料や医科器械を納めてきました。私は、1968年(昭和43年)に入社し、倉田病院の担当になりました。

重久院長が倒れたのは平塚七夕まつりの最中で、「院長が倒れて手動の呼吸器で治療を行っているが、最新の人工呼吸器の手配を至急頼む」という緊急依頼でした。直ちに、東京のメーカーに発注して車で東京に向かい、人工呼吸器を積んで平塚に運び込み、その間に6,000リットルの酸素ボンベ2本も手配して病院に届けました。重久院長には父の代からお世話になっており、私も目を掛けていただいていたので、とにかく必死でした。

重久院長は遂に再起が叶いませんでしたが、和久院長が見事に跡を受け継いだと思います。特に、経営が厳しくなった時期に、自ら勉強されて透析業務を始めたことに敬意を表します。和久院長とは、ロータリークラブやボーリング、釣りなどでご一緒させていただきましたが、療養型への転換に向けこれからという時に亡くなられたことが本当に残念です。



西方 晃  
株式会社いわしや西方医科器械 会長  
医療法人財団倉田会 理事

1972年(昭和47年)の平塚駅と1973年6月26日にオープンした駅ビル「ラスカ」



平塚市博物館



▲1970年に撮られた創立50周年の記念写真

### 平塚市にて開業100周年記念を迎えて

私は父・重久の次男です。父は辛いことがあっても決して表に出さず、黙って仕事に打ち込む人でした。昼間の診療は勿論のこと、夜中でも日曜休日であろうが往診をして自分の子供4人を医者にしました。私は高校2年で車の免許を取得して休日、夜中の運転の時はよく起こされていました。

さらに、外科医としての父は見事なもので、虫垂炎の手術では指で癒着した患部を柔らかく剥がして鉗子で患部を露出して素早く切り取るのですが、当時では急性虫垂炎の手術がとてもうまいと評判でした。あまりにも患者さんが多く自宅にまで手術患者さんが入りました。救急外来では交通事故の怪我人が頻りに担ぎ込まれてきた時も、瞬時に見立てて治療を施す判断力も身内ながら一流だと感じたものです。

私にとって、父は常に大きな目標でした。兄・和久とは大学病院の同じ医局におり、兄は血管外科、私は小児外科を専攻しました。

昭和46年、父が脳卒中中で倒れたことで世間の医師から「倉田病院は大丈夫か」と危ぶむ声も聞こえてきました。評判を落とさないために、兄と2人で頑張りました。

難しい手術では兄が麻酔を担当し、私が執刀するという二人三脚で行いました。ある夜、胸を刺された瀕死の患者が運び込まれてきましたが、すぐに処置して助けることができました。

また、交通事故で肝臓が破裂した5歳児が運び込まれた時も、2人で連携して、無事に手術を終えた時、兄と手をとりあって喜んだことを鮮明に覚えています。私も年齢的に救急医療のセンター的存在を断念して昭和58年南金目で開業しました。

現在では子供3人医者になり、私の仕事を応援して助けてくれています。



倉田 達明  
医療法人社団 倉田クリニック 院長

## 救急医療を強化、透析業務を開始

倉田病院は、1980年、二次応需病院として内科・外科の同時受け入れを行い、平塚市の救急外来の多くを引き受けてきた。

その後、生活習慣病に伴う腎不全の増加に対応するため、1988年より透析業務を開始した。

### ■ 第3代院長に和久が就任

倉田和久は、1968年(昭和43年)に慈恵医大を卒業後、大学病院に勤務しつつ、週2日ほど倉田病院に出張していた。胃がんなどの大きな手術がある場合は、麻酔医として手術室に入り、父・重久院長の執刀をサポートした。

1971年に重久院長が倒れたのを機に、和久は大学病院を辞して倉田病院に移った。やがて、次男・達明も慈恵医大を卒業すると倉田病院に合流した。二人はお

互いに切磋琢磨しつつ協力しあい、診療や手術に取り組んだ。そんな努力が報われて、倉田病院の評判も高まっていった。

1974年には、特定医療法人を取得した。特定医療法人とは「財団又は持分の定めのない社団の医療法人であって、その事業が医療の普及及び向上、社会福祉への貢献その他公益の増進に著しく寄与し、かつ、公的に運営されていることにつき国税庁長官の承認を受



▲ 3代目院長 倉田和久(くらた かずひさ)

### 経歴

- 1942年(昭和17年) 神奈川県平塚市に生まれる
- 1968年(昭和43年) 東京慈恵会医科大学卒業
- 1971年(昭和46年) 倉田病院に赴く
- 1974年(昭和49年) 倉田病院第3代院長に就任  
特定医療法人を取得
- 1980年(昭和55年) 二次応需病院として内科・外科同時引き受け
- 1981年(昭和56年) 倉田病院管理棟竣工
- 1988年(昭和63年) 透析医療開始。医療法人財団 倉田会理事長に就任
- 1990年(平成2年) 神奈川県病院協会常任理事に就任  
湘南西部病院協会会長に就任
- 1994年(平成6年) 日本外科学会認定医
- 1996年(平成8年) 平塚市東真土に「しんど老人保健施設」開設  
同地に「しんど訪問看護ステーション」併設
- 1998年(平成10年) 日本透析医学会認定医
- 1999年(平成11年) 平塚市明石町の倉田病院を東真土に移転、「くらた病院」に改称  
明石町に「平塚中央クリニック」開設
- 2001年(平成13年) 東真土に「しんど在宅介護支援センター」開設  
神奈川県保健衛生県知事表彰を授与
- 2002年(平成14年) 死去。享年59歳

### ▼1979年ごろ 家族で



平塚市博物館



けた」機関をさす。

この年、和久は第3代倉田病院長に就任している。そして、1979年に第2代院長重久が永眠した。享年71歳であった。

### ■ 平塚の救急外来を一手に引き受ける

1980年、倉田病院は、二次応需病院として内科・外科同時引き受けを行った。消防法の「救急病院等を定める省令」による救急指定病院は、一次救急、二次救急、三次救急に分けられている。一次救急は入院の必要のない軽症患者の救急医療、二次救急は24時間態勢で救急患者の受け入れができ、手術を含めた入院治療を提供できる設備が整っていること、救急医療の知

識と経験が豊富な医師がいること、救急患者のための専用病床が整備されていることなどの条件を満たす必要がある。三次救急は大学病院など高度医療が提供できる医療機関をさす。倉田病院は、二次救急において内科・外科同時引き受けを実施したことで、平塚市の数多くの救急患者を受け入れてきた。

こうした業務の広がりに対応して、老朽化が進んでいた病院北側の管理棟を建て替えることになった。

建設工事は順調に進み、1981年6月に竣工している。

### ■ 透析業務を開始

1980年代半ばになって、倉田病院の経営は大きな転機を迎えつつあった。二次応需病院は社会的に大き

な貢献を果たすものであったが、経営的には、24時間対応で経験豊富な医師と看護師を常駐させなければならず、それが徐々に経営を圧迫してきたのも事実だった。和久院長は、徹底した経費削減などの経営改革に取り組んできたものの、将来を見通せば新たな業務の柱を築く必要があると考えた。

和久院長が目にしたのは、「人工透析」であった。高齢化が進む日本においては、生活習慣病のひとつである糖尿病の増加が社会的課題となっており、糖尿病由来の腎不全も急増していた。そうした患者の最後の拠り所が人工透析であった。

和久院長は、当時、東海大学医学部付属病院に勤務していた弟の隆に相談した。東海大学の腎センターは

人工透析で大きな実績をあげていたからである。隆の紹介で、和久院長は東海大学医学部付属病院に週2回通って人工透析の研修を受講し、日本透析医学会認定医を取得した。そして、1988年より人工透析機器を7台導入して、透析業務を開始した。

いわしや西方医科器械の西方晃会長も「当時、倉田会の理事を務めていたが、当社でも透析開始に向けてお手伝いをした。透析は時間もかかり患者の負担も大きいと、和久院長は病室に姿見を取り付けて花を生けるなど患者目線でおもてなしをされており、ずいぶん感心した」と語っている。

こうして、倉田病院は新たな経営の柱を確立し、和久院長は理事長に就任した。



◀ 1979年3月14日  
済生会江南看護学院 卒業記念



▼ 1981年1月30日 倉田病院管理棟地鎮祭



1976年(昭和51年)5月1日 平塚市博物館開館

平塚市博物館



▲ 1981年6月30日 倉田病院管理棟竣工

### 透析業務の開始にささやかながら貢献

子供の頃は、一般外来に救急外来、往診、結核患者の治療と忙しく働いている父・重久を見て尊敬しつつも大変だなと考えていました。そんな仕事ぶりを見ていたので、高校時代は建築方面に進もうと考えていました。

しかし、父から「お前は医者にならなくてもいいよ」と言われてかえって反発心が起き、慈恵医大を受けました。合格通知が届いて父が大喜びするのを見たとき、これは計られたかなと苦笑したものです。

兄たちは外科を選びましたが、私は内科を志しました。父が倒れたのは、私が卒業する前のことなので、和久、達明の兄2人が倉田病院で奮闘する姿を外から見るだけで一緒に働くことは叶いませんでした。その後、私が東海大学医学部付属病院の呼吸器内科に勤務していた頃、和久院長から透析業務について相談を受けました。そこで、東海大の腎センターに勤める慈恵医大時代の友人を通じて腎センターの先生に、兄に対する研修をお願いしました。

倉田病院が透析業務を実施するには、資金面も含めて栄子常務が大変な苦勞をされたと思います。ささやかながら自分も役立てたことがうれしかったですね。



倉田 隆  
医療法人 百合が丘クリニック 院長



## 救急医療から療養型医療へ

倉田会では、介護保険法の制定に応える形で、平塚市東真土に用地を確保し、1996年に「しんど老人保健施設」「しんど訪問看護ステーション」を相次いで開設した。1999年には、明石町の倉田病院を療養型病院に用途変更して東真土に移し「くらた病院」を開設した。

### 療養型医療への転換

1990年代に入って、日本では医療技術と医薬の進歩によって急性疾患を克服してきたが、一方でがんをはじめ高血圧や心臓疾患、脳疾患、糖尿病などの生活習慣病が急増し、医療費の増加による医療行政の破綻が危惧されるようになってきた。そこで、厚生労働省は超高齢化社会を見据えて慢性型の患者を社会全体で支えていく仕組みとして、1997年(平成9年)に介護

保険法を制定した。

倉田会では、これに応える形で、1996年7月に平塚市東真土に新たな用地を確保して「しんど老人保健施設」を開設した。老人保健施設とは、心身の機能回復訓練、食事・排泄・入浴・就寝・健康管理などの日常生活の介護、心身の機能維持などのサービスの提供を行い、療養者が自宅での生活に復帰できることを目標とする施設である。

同年10月には、同地に「しんど訪問看護ステーション」を併設し、在宅の療養者、要介護者に対するサービスを始めている。

1999年8月には、平塚市明石町の倉田病院を一般病院から療養型病院に用途変更して東真土に移転、「くらた病院」として装いを新たにした。これと併せて、救急告示を辞退することで、急性期病床から療養型病床への転換が成った。

一方で、明石町の病院に通う患者さまへの配慮として、同地に「平塚中央クリニック」を開設して、診療と健診を続けることにした。ちなみに、平塚中央クリニックは10年以上にわたり地域診療を継続し、役割を果たして2010年4月に閉鎖した。

### 和久理事長から康久理事長へ

和久理事長は2001年に「しんど在宅介護支援センター」を開設するなど、療養型病床への仕上げに向けて精力的に取り組んできた。しかし、2002年志半ばにして逝去した。享年59歳の若さであった。和久理事長は、1990年に神奈川県病院協会常任理事を務め、2001年には神奈川県保健衛生県知事表彰を授与されるなど社会的にも大きな役割を果たしてきただけに、その死を惜しむ声は多かった。

大学時代にはアイスホッケーの選手として活躍した和久理事長は、仕事面だけでなく、ロータリークラブの活動や遊びの面でも全力で取り組む人だった。ボーリングに釣り、車、ヨット、アマチュア無線など趣味も多彩



▲1994年 院長と



▲1995年 院内で

▼1994年12月22日 平塚警察署からの感謝状



▲1996年7月 しんど老人保健施設を平塚市東真土に開設



▲平塚中央クリニック(旧倉田病院跡)



◀しんど老人保健施設職員とのバーベキュー

▼1996年9月 河野洋平氏と



で、とりわけクレー射撃は国体級の実力だった。

和久理事長の遺志は、長男である倉田康久に託されることとなった。和久理事長の3回忌にあたって、倉田康久理事長・病院長は、父和久に次のような言葉を贈っている。

あなたは息子から見ている父親でした。残念なのは医師としてあなたと接する時間があまりにも短かったことです。病気の発見から一年半、短い時間でしたが一緒に仕事ができなかったのはかけがえのない時間でした。あなたが遺してくれた物を大切にしながら頑張っていきます。



▲1998年4月1日 日本透析医学会認定証

▼1999年8月 倉田病院を平塚市東真土に移設「くらた病院」に改称



▼1999年9月9日 救急医療に精励したことにより表彰される



### 地域の皆さまを第一として

療養型への転換は、地域におけるトータルケアに向けた大きな一歩でした。老人保健施設の開設は、平塚市では2番目になります。開設においては、和久の妹で社会福祉士の資格を得ていた知子が果たした役割が大きかったですね。副施設長として介護士や看護師を統括して現場の最前線に立って業務を軌道に乗せてくれました。

1999年の倉田病院の東真土への移転でも、和久院長が最も心をくだいたのは、地域医療に求められる役割でした。創立以来、地域の皆さまのお世話になってきた明石町の病院をただ廃止するのでは、これまで通ってこられた患者さまに大変なご迷惑をおかけすることになります。そこで、「平塚中央クリニック」を開設することにしました。平塚中央クリニックは、10年を経て役割を終えましたが、これからは倉田会は地域の皆さまを第一として取り組んでいきたいと思っています。

ここに、100周年を迎えることができましたのも、多くの皆さまに支えていただいたおかげであり、あらためて深く深く感謝申し上げます。

これからも、倉田会の理念「ともにあゆむ」を大切にして一生懸命努めて参りたいと思います。ありがとうございました。

倉田 栄子  
医療法人財団 倉田会 常務理事



## 「予防」「医療」「介護」にわたるトータルケア

倉田会は、2002年に就任した倉田康久理事長のもと、2004年に「えいじんクリニック」、2006年に「平塚市高齢者よろず相談センター倉田会（地域包括支援センター）」、2008年に「倉田会メディカルサポートクリニック」を相次いで開設した。それとともに、「くらた病院」「しんど老人保健施設」「しんど訪問看護ステーション」を充実し、「予防」「医療」「介護」にわたるトータルケアサービスを通じて、地域における「QOL\*」「健康寿命」の維持・向上に貢献している。

\*QOL：Quality of Life 生活の質

### ■ 患者さま、地域、関係者、職員とともに

2002年（平成14年）に倉田会理事長・くらた病院院長に就いた倉田康久は、和久理事長の志を受け継いで「地域に根を張った医療」に一層力を注ぐことにした。

おりしも、倉田会は2003年に創設80周年を迎えた。倉田会の理念である「ともにあゆむ」のもと、「患者さまとともに」「地域とともに」「関係者とともに」「職員とともに」歩んでいくことを誓っている。

倉田会の理念について、康久理事長は「和久理事長

の早すぎる逝去により、凶らずも若輩の私が理事長に就くことになりました。伝統ある倉田会の運営は私一人ではできません。倉田会の職員一人ひとりが、より力を発揮しやすく、安心して働ける環境づくりに努めることを第一にしました。同時に、倉田会は患者さまやご家族、地域の皆さまのご理解・ご支援、平塚市をはじめ連携を結んでいる医療機関や大学病院をはじめ、さまざまな関係者の方々に支えられてきました。

医療・介護を取り巻く社会環境が大きく変わっていく

なかで、倉田会が『地域に根を張った医療』を継続し、予防・医療・介護にわたるトータルケアサービスを深めていくには、皆さまのご協力が欠かせません。そうした思いを『ともにあゆむ』という言葉に込めています」と語る。

2000年代に入って、国連の世界保健機関（WHO）は「健康寿命（平均寿命から日常的に医療・介護を受ける期間を除いた期間）」を伸ばすことを提唱し、日本の厚生労働省も「QOL（身体的・精神的・社会的・文化的に満足できる豊かな生活）」の維持・向上を掲げている。

康久理事長の志は、まさに、地域における「健康寿命」「QOL」向上の実践であった。

### ■ 外来透析の「えいじんクリニック」を開設

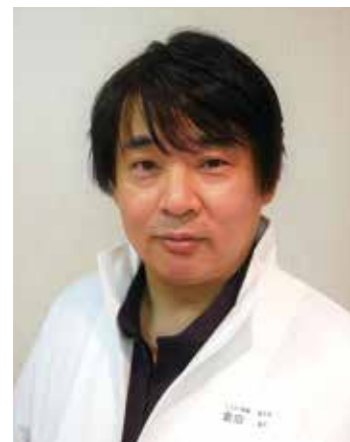
康久理事長は、予防・医療・介護にわたるトータルケアサービスを推進するため、次々と施策を打ち出した。

2004年には、東真土に外来の透析治療を主とする「えいじんクリニック」を開設した。

透析治療は、腎不全を来した患者さまに対し老廃物や水分の除去などの血液浄化を行うものだが、1回4～5時間の治療を週3回行う必要があり、透析に伴うさまざまな合併症も問題視されていた。合併症の原因として、透析で使われる血液と接する透析液の汚染が疑われており、より綺麗な透析液が望まれていたが、当時はまだ透析液の清浄化は行き渡ってはいなかった。

えいじんクリニックでは、いち早く開設時より透析液の清浄化に取り組んでおり、合併症の少ないより安全で快適な透析を行った。

また開設後も最新の透析機器の導入や透析方法を通じ、患者さま一人ひとりの「QOL」を高めるための努力を続けている。



▲ 4代目院長 倉田康久

#### 4代目倉田康久の経歴

西暦（和暦）	経歴
1997年（平成9年）	9月 聖マリアンナ医科大学医学部卒業
2002年（平成14年）	1月15日 くらた病院院長に就任 医療法人財団倉田会の理事長に就任
2004年（平成16年）	12月 えいじんクリニックを平塚市東真土に開設
2006年（平成18年）	4月 しんど在宅介護支援センターを閉所 平塚市の要請により平塚市高齢者よろず相談センター倉田会（地域包括支援センター）を平塚市東真土に開設
2008年（平成20年）	9月 倉田会メディカルサポートクリニックを平塚市四之宮に開設（平塚中央クリニックから健診業務を引継ぐ）
2010年（平成22年）	4月 平塚中央クリニックを閉院
2017年（平成29年）	4月 くらた病院西病棟の介護型療養病床30床を医療型療養病床に転換し全病床79床が医療型療養病床となる。

#### ▼ 聖マリアンナ医科大学時代



#### ▼ 2004年5月7日 えいじんクリニック地鎮祭



2004年12月 えいじんクリニックを平塚市東真土に開設 ▲▶  
外観全景、1階待合室、2階透析室



■ 平塚市の委託で「平塚市高齢者よろず相談センター倉田会（地域包括支援センター）」を開く

2006年（平成18年）には、平塚市の委託事業として「平塚市高齢者よろず相談センター倉田会（地域包括支援センター）」を開設した。

「地域の高齢者の方々が住み慣れた土地でそのらしい暮らしを過ごせるための身近な相談窓口」として、介護に至らないための介護予防マネジメント、健康・福祉・医療・介護に関する相談、さらには高齢者の虐待防止・消費者被害対応といった権利擁護、高齢者の主治医・介護支援専門員、行政の関係機関などとの協働による包括的・継続的ケアマネジメントまで幅広い相談に応えている。

■ 市街地に「倉田会メディカルサポートクリニック」を開設

「予防」面の施策でも、2008年に、平塚市四之宮に「倉田会メディカルサポートクリニック」を開設した。

倉田会では、倉田病院において1963年に健康診断業務を開始し、いち早くレントゲン車を導入して平塚市周辺の工場や企業施設などへの出張健診を行うなど、地域の人々の健康管理と病気予防・早期発見・早期治療に貢献してきた。

近年では、がんや脳血管疾患、心疾患などが死因の多くを占めており、それらの原因となる糖尿病、高血圧など生活習慣病の早期発見と治療が求められている。そのため一般健診、がん検診が一層重要になっている。

倉田会では、倉田病院が東真土に「くらた病院」として移転した後も、同建物に開設した「平塚中央クリニック（2010年閉院）」にて健診業務を行ってきた。しかし、

建物が老朽化したこともあり新たに四之宮に用地を確保して健康診断専門のクリニックを開くことにした。

「倉田会メディカルサポートクリニック」では、健診コースとして、一般健診、婦人科検診、人間ドックを設定している。特に、「女性に優しい」をモットーとして女性専用フロアを用意し、最新設備のもとで子宮がん検診・乳がん検診などを行って病変の早期発見に力を入れている。一般健診や人間ドックにおいても、健診結果をふまえた生活改善の指導を重視しており、専門医療機関や「くらた病院」との連携で早期治療に向けたサポートを行っている。

■ 透析、リハビリを主体とする「くらた病院」

康久理事長は、「くらた病院」の強化にも力を注ぎ、2017年には介護型療養病床30床を医療型療養病床に転換し、より多くの医療が必要な患者さまの受入れを

行えるようにした。これにより、79床の医療型療養病床となった病院では、現在入院が必要な透析患者さまを中心に入院治療を行っている。また、外来診療では、当初内科・外科・整形外科だけの開設であったが、乳腺外科・糖尿病内科・神経内科の専門外来の他、訪問リハビリテーションを実施し患者さまの診療を行っている。

入院治療では、「くらた病院」は透析とリハビリを軸に長期入院が必要な患者さまに、より良い入院生活を提供できるようにしている。倉田会における透析治療は、1988年に明石町の倉田病院に始まり、東海大学医学部附属病院の腎センターのサポートを受けて実績をあげてきた。1999年には、東真土に新たな用地を求め、「くらた病院」として最新設備のもとで治療にあたっている。

康久理事長は就任した2002年時には12床だった透析病床を現在、25床にまで増やし、より多くの患者さま



▲2006年 平塚市高齢者よろず相談センター倉田会（地域包括支援センター）



▲2008年9月 倉田会メディカルサポートクリニック



▲2013年ごろの診察風景



▲2019年10月 職員旅行

▼くらた病院上空から平塚の街と富士山を望む



湘南ベルマーレのオフィシャルクラブパートナーとしてチームを応援

2010年7月に湘南ベルマーレのオフィシャルクラブパートナーとなり、平塚競技場メインスタンドバナーに「医療法人財団倉田会 くらた病院」のロゴが掲出された。

負傷者を運ぶ救護員のピブスと担架にロゴを掲出

2018年JリーグYBCルヴァンカップで悲願の初優勝



©SHONAN BELLMARE

に入院透析を行えるようにしている。

入院透析では、最新の透析療法や特殊血液浄化療法を実施する一方、心疾患や糖尿病などの基礎疾患に対する治療・ケアを併せて総合的にサポートしている。

一方、リハビリテーションでは、外来・入院・訪問のサービスを実施している。外来・入院では徒手の刺激で痛みや痺れを消失させ筋肉の緊張を除くマイオチューニングアプローチ (MTA: Myotuning Approach) や、さまざまな物理療法を採り入れて、患者さまのQOLの向上を図っている。訪問リハビリテーションについても、ご利用者の生活状況・住宅環境を踏まえてリハビリテーション計画を作成し、きめ細かなサービスを提供している。

#### ■ 健やかで明るい未来のために

2023年(令和5年)、医療法人財団 倉田会は、創立100周年を迎えた。

倉田康久理事長は「超高齢化社会・少子化社会が進むなかで、倉田会に関わる皆さまの幸せのために何ができるかということに常に考えてきたし、これからも一層力を入れていきたいと思っています。もちろん、倉田会だけでは限界がありますが、さまざまな関係者の皆さまとの協働により、予防・医療・介護にわたるトータルケアサービスを深化させることで、地域の皆さまの健やかで豊かな暮らしに貢献していきたいと願っています。

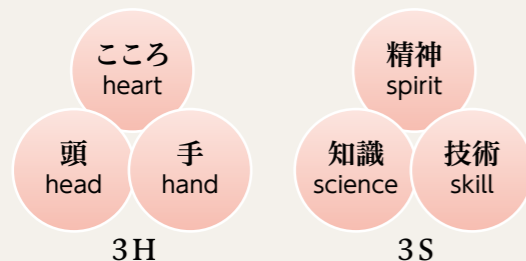
そして、次の100年へ。『いつか病院の要らない社会』が来ればそれが一番良い。その時に倉田会がどのような形になっているかは解らないが、既存の価値観にとられることなく、関わるすべての人々にとって身近で幸せを提供できる存在であれば良い。その時まで、そしてその後も「ともにあゆむ」ことが大切だと考えています」と語っている。

#### 「KURATA SPIRIT」を次の世代に

東海大学医学部付属病院の腎センターに所属していた私は、和久理事長が透析医療を開始した1988年(昭和63年)から、非常勤で倉田病院に勤めてきました。当時、透析患者は勤め先を退職するのが当たり前という時代でしたが、私の信念は「透析を受ける方は病者ではない、自己管理とリハビリで社会復帰できる」というもので、倉田病院はその実践の場でした。実際に、多くの方が透析を受けながら仕事をし、時に旅行を楽しんでおられます。

2010年(平成22年)4月から「くらた病院」の院長を務めました。1年後の3月11日の東日本大震災の際、病院スタッフが一丸となって患者さまを守る姿を目の当たりにして、あらためて心強く思ったものです。

医療をとりまく環境は大きく変わりつつありますが、大切なのは「人」です。スタッフの皆さんには、100年続く「KURATA SPIRIT」を受け継ぎ、患者さまのために常に自己研鑽を怠らず、次の時代の「くらた病院」を担っていただきたいと願っています。



飛田 美穂  
くらた病院名誉院長  
(倉田会 元理事)



## 第2章 施設のご紹介

- ・くらた病院
- ・しんど老人保健施設
- ・えいじんクリニック
- ・倉田会メディカルサポートクリニック
- ・しんど訪問看護ステーション
- ・平塚市高齢者よろず相談センター 倉田会 (地域包括支援センター)

# くらた病院

## —地域に根づく医療機関として—

くらた病院は、1923年（大正12年）の倉田療院の創設にはじまり、

100年にわたって地域の皆さまに医療サービスを提供してきました。

当院は、2017年（平成29年）より、79床の医療型療養病床となりました。

さらに、2022年（令和4年）には、入院を必要とする患者さまの透析ベッドを25床に増床し、

一般外来の患者さまの診療とともに、慢性疾患を抱える入院患者さまの治療と、

急増しつつある腎疾患における透析治療に力を注いでいます。

また、充実したリハビリテーション設備とスタッフを備え、

外来、入院、訪問リハビリテーションサービスを含めて、通院が困難となった患者さまも

安心して継続した治療を受ける環境を整えています。

特に、透析では、最新の血液透析療法や血液濾過透析療法を導入し、

安心・安全かつ患者さまの身体の負担の少ない療法を推進しています。

くらた病院の医療スタッフは、これからも自己研鑽に励み、

「患者さまとご家族のために最善の医療を提供」を使命としていきます。

## ■ より良い医療・介護を提供するために

### ■ 患者さまの側に立って取り組む

くらた病院では、患者さまが安心して治療、看護、介護が受けられるように、診療部、看護部、医療技術部、事務部（総務課、医事課、医療相談室など）の各部門が力を合わせ、一人ひとりを大切にしたいサービスを提供しています。

「診療部」では、一般外来（内科・外科・整形外科・乳腺外科・糖尿病内科・神経内科）から入院治療、リハビリテーションにわたり、最新の医療設備のもとで診断、治療を行っています。

「看護部」では、患者さまの人権を尊重し、入院患者さまには患者さま中心のチーム医療・介護に取り組んでおり、外来においても医師と患者さまの間に立って診療が円滑に行えるように配慮しています。さらに、人材育成と自己啓発・研鑽を通じて看護・介護の質の向上をめざしています。

「医療技術部」には、薬剤科、栄養科、放射線科、

検査科、臨床工学科、リハビリテーション科があります。

「薬剤科（薬局）」では、患者さまに正しい薬の情報をお伝えし、薬の飲み忘れなどが起きないように正しい使い方を指導しています。また、院内での感染予防のために消毒薬の管理・正しい使用法なども指導しています。

「栄養科」では、管理栄養士のもと、医師の指示に基づいて入院患者さまの療養食を提供するだけでなく、患者さまの喫食率や摂食・嚥下動作などを確認しています。また、食事療法が必要な外来患者さまに対する栄養指導や持続可能な食事療法を提案しています。低栄養状態にある患者さまに対しても、調理の工夫や栄養補助食品の提案などを通して、ご自宅でより良い暮らしができるよう努めています。

診療部	外来診療、入院透析、リハビリテーションなどすべてにわたり、患者さまの治療に幅広く取り組んでいます。
看護部	外来、透析、入院の患者さま一人ひとりを大切にして看護・介護にあたっています。
医療技術部	放射線科：安全・安心な診断・治療に向けて技術の向上に努めています。
	検査科：健康状態を知り、疾患の早期発見のために臨床検査を行っています。
	薬剤科（薬局）：経験豊富な薬剤師を中心に、薬剤管理と調剤を行っています。
	リハビリテーション科：外来・入院・訪問のリハビリテーションを行っています。
	臨床工学科：人工臓器装置はじめ高度管理医療機器の点検・保守、精度・安全の管理などを行っています。
栄養科：入院患者さまへの療養食の提供、外来患者さまの栄養指導を行っています。	
医療相談室	医療ソーシャルワーカーが、患者さま・ご家族の医療・介護に関する相談をお受けしています。
医療安全管理室	患者さまの安全・安心のため、医療安全の維持向上に努めています。

■ 安全・安心な最新設備のもとで

「放射線科」では、胸部・腹部・手足の骨・関節の一般X線撮影のほか、低被ばくの16列マルチスライスCT装置を採用しています。さらに、骨粗鬆症の予防、治療効果の判定や透析患者さまの骨量変化の経過観察などを行うため、ごく微量のX線を使用して骨密度(カルシウム量)を測定する骨密度測定装置を導入しています。

また、患者さまが安心して検査が受けられるように放射線機器管理、画像情報管理を徹底し、診断や治療に貢献できるよう日々技術の向上に努め

ています。画像情報管理ではPACS(医療用画像管理システム)運用を開始しています。完全フィルムレス化により全ての検査画像を瞬時に検索でき、患者さまの待ち時間減少にもつながっています。

「検査科」では、血液検査や尿検査だけではなく、超音波検査、心電図検査、動脈硬化検査、肺機能検査など幅広い臨床検査を行っています。特に、超音波検査はX線を使用しない乳腺の検査も可能で、年齢の若い方や授乳期の方を対象とする検査の精度向上につながっています。



16列マルチスライスCT装置

超音波診断装置による検査



■ 生活の質(QOL)の向上のために

「リハビリテーション室」は、外来リハビリテーション、入院リハビリテーションに加え、訪問リハビリテーションの3種類のサービスを提供しています。

訪問リハビリテーションは、ご利用者さま宅にお伺いし、利用者さまの身体の状態や生活状況、住宅事情などを踏まえてリハビリテーション計画を立て、その方らしい日常生活を送ることができるようサポートします。

外来リハビリテーション・入院リハビリテーションでは、マイオチューニングアプローチ(MTA: Myotuning Approach)を採り入れています。筋肉は痛みがあると防御的に硬くなり、動きが鈍く

なります。マイオチューニングアプローチは、痛みの場所を探し出し、徒手を用いて刺激することで痛みや痺れを消失させて筋肉の緊張を取り除く手法です。

また、人工透析を受けている患者さまや歩行困難な方に対しては、足こぎ車椅子を用いた運動を実施するなど、患者さまへの過度な負荷にならない運動を提供しています。

物理療法機器では、フィジオアクティブHV(ハイボルテージ電気刺激治療機器)、拡散型ショックウェーブショックマスター(圧力波治療機器)などの最新機器を導入しています。

リハビリテーション室



■慢性疾患の治療と併せた入院透析

血液透析医療は、医師、看護師、臨床工学士、薬剤師、栄養士などが連携するチーム医療です。

当院の透析室は、2022年(令和4年)4月にリニューアルオープンし、22床から25床に増床。長期入院が必要な一般病棟に入院している方の転院の受け入れを行っています。

慢性の病気のために腎臓の機能が正常時の30%以下に低下すると血液の濾過が充分に行えず、水分のコントロールや老廃物の排出が困難になります。そのような場合に人工的に血液の浄化を行うのが透析療法で、主に「血液透析療法」と「血液濾過透析療法」があります。

入院透析では、RO水処理装置、透析液供給装置、多人数用透析コンソールの連動システムを構築して安全性の確保を図り、血液透析濾過(オンラ

インHDF)を中心とした透析療法から特殊血液浄化療法まで、多様な治療を提供しています。

透析治療では長時間におよぶ体外循環を安全・適正に遂行するとともに、患者さまの病気や透析治療についての理解、食事、水分、服薬、フットケアなど自己管理状況、合併症による身体状況、生活行動情報などを総合的に把握して、継続的、永続的な慢性疾患に対する治療、看護に努めています。

医師、スタッフについても、日本透析医学会認定医をはじめ、血液浄化専門臨床工学技士、不整脈治療専門臨床工学技士、透析技術認定士、呼吸療法認定士、慢性腎臓病療養指導看護師などの資格取得者をそろえ、日本透析医学会、日本腎不全看護学会、日本HDF研究会などの学会に継続的に論文発表を行うなど、最新治療に向けた研究・自己研鑽を続けています。

透析室



●ワンフロアに集約された透析室

感染防止のための個室の透析室も用意しています。

●無酢酸透析液(カーボスター P)

血液動態への影響が少なく心機能抑制がないため、透析の治療効果が向上します。

●特殊血液浄化療法

「単純血漿交換療法 PE(Plasma Exchange)」、  
「二重濾過血漿交換療法 DFPP(Double Filtration Plasmapheresis)」、  
「血液吸着療法 DHP(Direct Hemo Perfusion)」、  
「血漿吸着療法 PA(Plasma Apheresis)」など、最新の特殊血液浄化療法を実施しています。

●腹水濾過濃縮再静注法

溜まった腹水をバッグに取り出し、濾過器を用いて細菌やがん細胞などを除去した後、濃縮器で除水を行い、アルブミンなどの有用な物質を濃縮して再び体内に戻す治療法。

患者さま一人ひとりに最良の医療をお届けします

くらた病院は、急性期を脱して病状が落ち着いた患者さまや、慢性疾患を抱える患者さまを対象とする医療型療養病床を主体としています。とりわけ、透析においては、腎臓学会や透析医学会に所属する専門医が常勤しており、最新の知識と豊富な臨床経験を生かして患者さまの多様なニーズにお応えしています。

さらに、平塚市周辺の急性期医療を行う病院や、高度医療を行っている地域の公的病院や大学病院とも密接な連携をとって、患者さまにとって最善の医療を提供することに努めています。

また、患者さまの治療、看護・介護においては、患者さま一人ひとりを尊重し、薬の処方から正確で負担の少ない検査、適切なリハビリテーション、十全な療養食の提供、さらにはきめ細かな医療相談まで、最適な医療環境をお届けすることを心掛けています。

創立100周年を迎えて、私たち医療スタッフは、これからも倉田会の他の施設とも協働し、患者さまのために何ができるかを考え、そのための研鑽に励み、より良い医療サービスに取り組んでまいります。



北村 真  
医療法人財団 倉田会 くらた病院  
院長



# しんど老人保健施設

## —「その人らしく」をモットーに—

しんど老人保健施設は、1996年（平成8年）に開設された  
リハビリテーション施設・介護老人保健施設です。

当施設では、ご利用者一人ひとりの生活を尊重し、充実した生活を送ることができるよう、  
その方の能力に応じて、可能な限り居宅における生活への復帰を念頭に置いて、  
サービス提供に努めています。

当施設では、入所、短期入所、通所において、看護、医学的管理のもとで  
介護と機能訓練を行うとともに、必要な医療、日常生活上のお世話をを行うために、  
一人ひとりに対しチームを作って、総合的なケアサービスを提供しています。

また、当施設は、神奈川県事業の「身体拘束廃止推進モデル施設」となっています。

なお、関連施設として、居宅介護支援事務所、平塚市高齢者よろず相談センターがあります。

### ■ 自宅での日常生活に戻るためのリハビリ施設

#### ■ 一人ひとりに合わせたサポート

当施設では、ご利用者一人ひとりを担当するリ  
ハビリチームを作り、専門のスタッフが、利用者の  
状態に合わせて、歩行訓練や立ち上がりなど基本  
動作の訓練を行う理学療法、日常生活中心の訓  
練を行う作業療法を組み合わせサポートしてい  
ます。

#### ■ 最低基準以上のスタッフ配置

当施設では、朝晩の更衣・日中の離床をはじめ、  
1日の生活そのものがリハビリになるよう、レクリ  
エーションやグループ活動などを行っています。

#### ■ 身体拘束廃止推進モデル施設

身体拘束とは、身体をベッドや車いすにしばる、  
ベッドを柵で囲うなど、行動を制限することです。  
身体的な機能低下を招くだけでなく、人権の点か  
らも問題があるとされています。2000年（平成12  
年）の介護保険法の施行に伴い、緊急やむを得ぬ  
場合を除いて身体拘束が制度上でも禁止となりま  
した。

当施設では、1996年の開設以来、直接的な身体  
拘束を行わないケアを実践し、知識や技術の向上、  
啓発に努めてきました。こうした取り組みが評価  
され、当施設は神奈川県事業の「身体拘束廃止推  
進モデル施設」となっています。当院は、これか  
らも身体拘束廃止における地域の中核施設としての  
役割を担っていきます。

#### しんど老人保健施設の理念・方針

- ご利用者やご家族の“ひと”としての尊厳を尊重する
- 在宅生活ができるだけ継続できるように支援する
- 地域社会の一員として社会に貢献する
- 常にサービスの質の向上をめざす



施設入口



ロビー

■ 利用者のニーズを踏まえたサービス

当施設では、ご利用者がその人らしく充実した生活が送れるように、ご利用者・ご家族の事情を踏まえて、入所、短期入所、通所のサービスを用意しています。

●入所

看護・医学的管理下で介護やリハビリテーションを行い、1日でも早くご自宅に復帰できるようにサポートし、また、在宅での生活を1日でも長く続けられるように支援しています。

●短期入所

ご自宅で介護されているご家族が一時的に介護できなくなった場合、ご家族に代わってお世話しします。

●通所

在宅で介護を受けている方ができる限り自立した日常生活を送ることができるよう、日常生活動作の安定と心身機能の維持を目的に、リハビリテーション、入浴などのサービスを提供しています。

■ 四季折々を楽しんでいただく年間行事

当施設では、ご利用者に四季の移ろいや生活のリズムを感じていただくことがリハビリテーションや介護において大切だと考えており、「もちつき大会」「雑祭り」「フルーツ狩り」「春の運動会」「七夕飾り」「作品展」「クリスマス会」など、1年を通してさまざまなイベントを実施しています。



リハビリ室



居室



通所リハビリ室



初詣



フルーツ狩り



七夕飾り



作品展

### ■ 知識・技術・実践力を高める

当施設では、介護職員をはじめすべてのスタッフが、専門知識や実技の研鑽に努め、実践の場に生かすことで、ご利用者がより安心して生活できる環境づくりをめざしています。また、ご利用者一人ひとりに担当チームを設け、それぞれが連携して総合的なケア、最適なサービスを提供しています。

### ■ 居宅介護支援事業所

当施設では、居宅介護支援事業所を併設してい

ます。居宅介護支援事業所は、介護保険で受けられるサービスや地域でのサービスなどの紹介を行ったり、介護事業者との連絡調整を行ったりする窓口です。

当事業所では、介護が必要な状態になってもできる限り住み慣れた居宅での日常生活を送ることができるよう、担当ケアマネージャー（介護支援専門員）が、介護に関するご相談に応じ、ご本人やご家族同意のもとで最適なケアプラン（介護サービス計画）を作成しています。



#### 居宅介護支援事業所の特色

- 担当者を決めて、責任ある対応をします。
- 居宅サービス事業者の選定は、ご利用者・ご家族に説明の上、同意いただき、交付します。
- サービス事業者の認定は、ご利用者・ご家族の希望を踏まえ公平中立に行います。
- 1カ月に1回はご自宅を訪問し、ご本人の状態やサービスの実施状況の確認を行います。
- 要介護認定の更新など居宅サービス計画を変更するときには、ご利用者に関わるスタッフが集まって担当者会議を行います。
- 緊急時に事業所として連絡が取れる体制を維持します。
- いつでも苦情を承る体制ができています。
- 個人情報の取り扱いは、厚生労働省が作成したガイドラインを遵守します。
- 職員は、在職中だけでなく退職後も守秘義務を守るよう契約書を取り、マニュアルに基づいた職員教育を徹底しています。
- 職員は質の向上のために、日々研鑽します。
- 当施設には、主任介護支援専門員を配置しています。
- 特定事業加算(2)の対象事業所として質の高いケアマネジメントを提供します。

#### より良い人生を過ごしていただくために

しんど老人保健施設には、入所、短期入所、通所をあわせ、現在、約200名のご利用者があります。当施設は、「その人らしく」をモットーに、日常生活に戻るためのリハビリテーションとともに、ご利用者の尊厳を大切に介護に取り組んでいます。

入所者の平均年齢は88歳に達していますが、「人生100年」の時代にあって、より良い人生の時間を過ごしていただくために、スタッフ一同、力を尽くしています。

ご利用者の多くはさまざまな慢性疾患を抱えておられ、骨粗鬆症などにより歩行が困難な方も少なくありません。当施設では、同じ敷地内の「くらた病院」の内科外科・整形外科などとも連携し、夜間を含め24時間体制で医療・看護面のサポートを行っています。

また、高齢者のリハビリ・介護は、ご本人はもとよりご家族のご苦勞も一通りではありません。私たちスタッフは、これからも専門知識・技術を高め、ご利用者とご家族の皆さまとともに歩みながら最善のサービスの提供に努めてまいります。



山崎 巖  
医療法人財団 倉田会  
しんど老人保健施設 院長

# えいじんクリニック

## —生活を保ちつつ透析治療を続けるために—

えいじんクリニックは、2004年（平成16年）に開設された、外来透析治療を専門とし、患者さまがより安全で安心な透析治療を受けることができるクリニックです。

えいじんクリニックでは、透析ベッド48床を完備しており、

隣接するくらすた病院内の人工透析センターとも連携し、

高度な技術を有する専門スタッフのもとで人工透析治療に当たっています。

透析は、一般に1回4～5時間かつ週3回受ける必要があるため、えいじんクリニックでは、患者さまのご都合に沿ってスケジュールを組み、さまざまなご相談にもお応えしています。

また、通院が困難な方には、無料の送迎サービス（車イス用の福祉車両も用意）も行っています。

えいじんクリニックでは、透析を受けられる患者さまが自分らしく暮らすことを大切にしています。

たとえば、旅行や出張、帰省先などでも患者さまが透析を受けられるように、

他地域の透析施設と連絡・手配をしています。

また、神奈川県に來られた患者さまに対しても、臨時透析をお受けしています。

## ■ 最新の透析治療設備を導入 — 外来透析について

### ■ 患者さまを第一とする透析治療

えいじんクリニックは透析ベッド48床を完備しています。うち1床は、感染症を予防する隔離透析室となっています。

設備では、オンラインHDFを中心とした最新の医療機器を導入し、水処理装置・透析液供給装置・患者監視装置などを完備、多人数用透析装置・個人用透析装置などをそろえて、さまざまな血液浄化療法を実施しています。

透析にあたっては、定期的にベッドサイドでシャントエコーを行ってシャント（透析のために動脈と静脈をあわせてつくった血管）異常の早期発見に努めています。さらに月一回のフットチェックを行い、下肢の血流低下や傷などができていないかなど、異常の早期発見にも配慮しています。

また、長時間にわたる透析を快適に過ごしていただけるよう、無料のテレビを設置しており、ご希望により弁当（治療食）も用意しています。

### えいじんクリニックの理念

- 患者さまを中心に最適な医療を安全に提供し、安心して通えるクリニックをめざします。
- 自分たちの仕事に責任と誇りを持ち、自己研鑽と育成に努めます。
- クリニックの発展と健全な運営に努めます。

### 【行動指針】

- 事故防止、感染予防について、患者さまと医療従事者の安全、安心の向上に努めます。
- 患者さまに対し、笑顔で親切にやさしく接します。
- 患者さまの満足と納得を得られるよう、分かりやすく丁寧に説明します。
- 快適な環境づくりに努めます。
- 新たな知識と技術を習得し、医療の質の向上に努めます。
- 全職員の自由な討論と参加を通じて進歩するクリニックにします。
- 規律を守り、公私を明らかにし、責任を果たします。
- 透析専門クリニックとして、透析患者さまの受け入れに柔軟に対応し、地域医療に貢献します。
- 健全なクリニック経営を図ります。

## ■ 透析までの流れ

えいじんクリニックでは、初めての患者さまに対し、親身になってご相談をお受けするとともに、院内見学を実施しています。透析治療にあたっては、患者さまと医師による面談とオリエンテーションを行って最善の方法を決め、患者さまのご希望に沿ってスケジュール調整を行ったうえで透析を実施しています。

### 1. 院内の見学

施設をご案内し、当院の設備や治療内容などについて分かりやすくご説明します。

### 2. 面談とオリエンテーション

医師との面談では、診療情報提供書を持参いただけます。面談により透析治療が決まった場合は、オリエンテーションにて必要な物、透析開始日、ベッド・施設などについてご案内します。

### 3. 治療スケジュール調整

仕事など患者さまのご都合を踏まえて、透析治療のスケジュールと一緒に考えていきます。通院が困難な方への送迎サービスも行っています。

## ■ 当院の透析治療の特色

### ■ より安心・安全なオンラインHDF、リクセル®

えいじんクリニックは、オンラインHDF治療を積極的に行っています。HDFとはHemodiafiltration（血液透析濾過）の略で、血液透析（HD）と血液濾過（HF）の利点をあわせた治療方法です。透析を行いながら濾過も行い、濾過した量と同じ量を補充液として注入します。

オンラインHDFは補充液に超純度に清浄化された透析液を使用するシステムで、これにより大量の濾過を行うことができ、さまざまな尿毒症物質を取り除くことができます。オンラインHDFには皮膚

掻痒症（かゆみ）、骨・関節痛、レストレスレッグス症候群（下肢のむずむず）の改善、透析アミロイドーシス（透析によって産生されたアミロイドと呼ばれる異常タンパクが蓄積して臓器障害を起こす疾患）の予防などの臨床効果が報告されています。

また、透析アミロイドーシスを合併した患者さまには、原因物質を取り除く吸着カラム（リクセル®）を併用した治療も行っています。



ロビー



透析室

■ 合併症を予防するフットケア

透析患者さまは、糖尿病などが原因で動脈が硬くなったり（動脈硬化）、血管にカルシウムが付着したり（動脈石灰化）することにより、足の血流が悪くなりやすいといわれています。血流の悪い状態で傷ができると深い潰瘍になりやすく、患者さまは免疫力が低下していることもあって潰瘍に細菌が入った場合に感染を起こしやすいといわれています。

当院では定期的なフットケアを行い、異常の予防および早期発見に努めています。



受付



外来患者さま用ロッカー



休憩室



透析室

■ 透析中のトラブルを防ぐシャントエコー

血液透析治療に必要なシャントは、時間が経つにつれて合併症が起こることがあり、透析中にトラブルが生じることもあります。これらの原因を調べるのに、超音波診断装置（エコー）を使ったシャントエコー検査が有効です。

当院では、熟練したスタッフにより定期的にシャントエコーを行い、シャントトラブルの早期発見に努めています。

■ 外来感染の防止対策

当院では、外来感染対策向上加算の届出を行っております。これに基づき、感染マニュアルなどの作成や発熱時の診察・検査の実施、連携施設との定期的なカンファレンスの実施、感染症発生時の訓練の実施などを行っています。さらに、患者さまの感染防止対策に力を入れ、安心して通院透析が受けられるように環境を整えています。

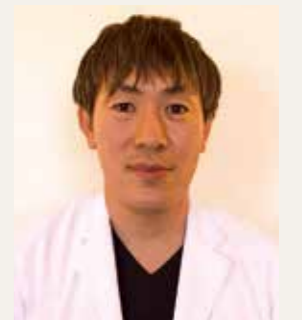
患者さまが自分らしく過ごせるために

私は、東海大学医学部を卒業後、横浜市立大学附属病院腎臓高血圧内科にて透析医療の研鑽を積み、2022年4月より、えいじんクリニックの院長に就きました。

透析治療は、医師、看護師、臨床工学士などがチームを作って行う究極のサービスです。それゆえ、私たちは、えいじんクリニックの「理念・行動指針」を定め、患者さまが自分らしく過ごせるように、チーム力を高めて最適な治療の提供に心がけています。それとともに、私たちは、日本透析医学会認定医、血液浄化専門臨床工学技士、透析技術認定士、慢性腎臓病療養指導看護師などの資格取得をはじめ、最新治療に向けて自己研鑽に努めています。

一口に患者さまといっても、透析を受けながら仕事を続けておられる元気な方、高齢で重い疾患を抱えておられる方などさまざまです。私たちは、患者さま一人ひとりの病態や生活事情などを踏まえ、倉田会の関連施設とも密接に連携して、基礎疾患の治療、日常の体調管理のケア、足腰の衰えた方へのリハビリテーションなど幅広いサポートを行っています。

私たちは、これからもチーム力を高め、一人ひとりの患者さまに寄り添って、より良い治療を行うために精進してまいります。



佐藤 陽  
医療法人財団 倉田会  
えいじんクリニック 院長

# 倉田会メディカルサポート クリニック

## — 健やかなこころと身体のために —

倉田会では、1963年（昭和38年）より倉田病院にて健康診断業務を開始しており、いち早くレントゲン車を導入して、企業・工場・各種施設などへの出張健診を実施しました。

こうした長年にわたる実績・ノウハウをもとに、2008年（平成20年）に「倉田会メディカルサポートクリニック」を開業しました。

倉田会メディカルサポートクリニックは、一般健診（特定健診）、婦人科検診、人間ドック、生活習慣病予防健診などを実施しており、重大な疾病の早期発見、早期治療に重点を置いて皆さまの健康確保のお手伝いをしています。

当クリニックでは、「女性に優しい」をモットーに女性専用フロアを設けるなど、婦人科検診の充実を力を入れています。

また、地域のニーズに応え、巡回健診では健診に加え、特殊健診やインフルエンザ予防接種なども実施しています。

### ■ 気軽に受けられる充実した健診コース

倉田会メディカルクリニックは、健康診断の普及に向けて、「女性専用フロアで気兼ねなく受診できる婦人科検診」、「苦痛の少ない経鼻内視鏡（鼻から入れる内視鏡）の採用」「職場や地域に伺う巡回健診」など、気軽に安心して健診が受けられる環境づくりに努めています。

健診コースは、「一般健診・特定健診」「婦人科検診」「人間ドック」があり、それぞれ豊富なオプション検査を用意しています。

### ■ 一般健診・特定健診・生活習慣病予防健診

当クリニックの一般健診には、労働安全衛生法に基づく「定期健診」と、雇用・入職時の「入社時健診」があります。いずれも、充実したスタッフのもとで診断を行っています。「特定健診」は、健康保険に加入している40～74歳のすべての方を対象としています。

#### 広々とした待合室

BGMのもと、リラックスして受診していただけます。

#### 診察室

受診に際し、問診を通じて健康管理や生活改善の指導、疾病の早期発見につなげます。

#### 胃部内視鏡室

苦痛や嘔吐感が少ないと評価されている胃部内視鏡（経鼻内視鏡）を導入しています。

#### 巡回健診車（レントゲン車）

職場・地域単位でスタッフとともに伺います。  
当クリニックでは巡回型インフルエンザ予防接種も実施しています。



受付

■ 婦人科検診

厚生労働省による健康診断や人間ドックの受診状況の調査によると、男性に比べて女性の受診率が大きく下回っています。特に主婦層などは「なかなか行く機会がない」「恥ずかしくて気後れする」などの理由で、未受診の方が多く見受けられます。しかし、乳がんや子宮がんなどは、特に痛みもないため見過ごされることが多く、年々、罹患率は増加傾向にあります。

当クリニックでは、気兼ねなく受診いただけるように「女性専用フロア」を用意し、マンモグラフィー（乳房X線）撮影や超音波検査などにより、乳がん検診や子宮がん検診を行っています。

女性専用フロア パウダールーム



● 乳がん検診

・視触診

乳房のくぼみ、乳頭の皮膚表面の変化を視診します。乳頭からの分泌物やリンパ節の腫れ、しこりがないか触診します。

・マンモグラフィー

石灰化した小さながんをX線装置でチェックします。

・乳腺超音波（エコー）

超音波で乳腺の状態をチェックします。

● 子宮がん検診

・超音波検査

子宮、卵巣の大きさと異常の有無を検査します。

・子宮細胞診

子宮の粘膜の細胞を取り、顕微鏡でがん細胞の有無をチェックします。

マンモグラフィー



超音波診断装置

■ 人間ドック

検査は日帰りで2時間半～3時間程度です。婦人科検査項目をプラスしたレディースドックもあります。



眼圧測定装置



内視鏡システム（経鼻内視鏡）

高度な予防医療を通じて、皆さまの健康管理に貢献します

ライフスタイルの多様化や食生活の変化に伴い、生活習慣病やストレスを抱える方が増加しています。そうした方々に対して、健康管理を中心とする予防医療の果たす役割が一層重要視されています。

当クリニックでは、倉田会が60年にわたって培ってきた健診実績のもと、最新の設備を導入し正確な検査を実施しています。さらに、当クリニックでは、検査データを踏まえた問診を重視しており、生活改善指導による生活習慣病の予防、重大な疾病の早期発見に力を注いでいます。

また、倉田会のくらすた病院とも連携し、私自身もくらすた病院にて内科・外科外来を担当するなど、健診データを共有しつつ最適な治療体制を築いています。

倉田会メディカルサポートクリニックは、これからも予防医療を通じて地域の皆さまの健康管理に貢献してまいります。



折井 香  
医療法人財団 倉田会  
倉田会メディカルサポートクリニック  
院長



# しんど訪問看護ステーション

## 一心のケアを大切にしています

しんど訪問看護ステーションは、1996年（平成8年）に訪問看護を目的として開設しました。

当ステーションでは、認知症ケア、緩和ケア、精神科訪問看護などを通じて、

患者さまが住み慣れた地域やご家庭に囲まれて気持ちよく過ごすことができるように、

心のケアを大切に、スタッフ一同、24時間対応でご支援しています。

### ■ 専門技術を高め24時間対応でサポート

しんど訪問看護ステーションでは、医師の指示のもと看護師がご自宅に伺って、専門的な視点を持って健康状態のチェック、入浴介助・清拭、医療機器の管理など医療処置、リハビリテーション、看取りなどの援助を行います。

看護師による24時間対応の訪問サービスなので、患者さま・療養者さまの病状が急変した場合にも、迅速・適切に対応することができます。

### ■ 認知症ケア

認知症ケアでは、認知行動療法を行っています。同療法は、精神疾患や鬱、認知症などの治療を目的に構造化された精神療法です。当ステーションでは、医師の指示のもと、患者さまのご自宅を訪問してカウンセリングなどを行っています。

### ■ 緩和ケア

終末期（がん末期）の療養者さまの多くが、自分の人生の意味・役割、残された日々の過ごし方、ご家族の行く末などについて悩みを抱えておられます。

当ステーションは、療養者さまとの信頼関係を築くことを第一として、療養者さまが限られた時間を有意義に過ごすためにお手伝いをさせていただいています。

### ■ 精神科訪問看護

精神科の専門研修を受けた看護師が、患者さまのかかりつけの医師と連携を取り、心身の状態のチェックやケアを通じて、生活の補助を中心に生活リズムを整えるためのサポート、復学や就職などの社会復帰に向けてのサポート、服薬の説明・サポートなどを行っています。



# 平塚市高齢者 よろず相談センター 倉田会 (地域包括支援センター)

—地域の高齢者が、その人らしく暮らすために—

平塚市高齢者よろず相談センター 倉田会 (地域包括支援センター) は、平塚市の委託を受けて、2006年 (平成18年) に開設しました。当センターは、地域で暮らす高齢者の方々が、住みなれた地域で、尊厳のある、その人らしい生活が送れるようお手伝いさせていただき、身近な相談窓口です。地域に暮らす人たちの介護予防だけでなく、日々の暮らしに関することまで、さまざまな側面からサポートしています。

## ■ 高齢者やご家族の皆さまの身近な相談窓口

平塚市高齢者よろず相談センター 倉田会 (地域包括支援センター) は、高齢者の方々の介護・福祉などに関するご相談、お立ち寄りいただいでる窓口相談と、電話による相談受付も行っています。緊急時には携帯電話により随時対応しています。

## ■ 介護予防ケアマネジメント

高齢者の皆さまが、住み慣れた我が家で自立した日常生活が継続できるように支援します。また、介護が必要な状態になることを予防するために、最適な介護予防サービスを調整します。

## ■ 総合相談

高齢者の皆さまやご家族、近隣に暮らす方の介護に関する悩みごとや、健康や福祉、医療や生活

に関わる心配ごとなど、さまざまな課題に対応します。

## ■ 権利擁護

高齢者の皆さまが安心して生き生きと暮らすために、皆さまが持っている権利を守ります。たとえば、高齢者への虐待や高齢者につけ込む消費者被害の防止、成年後見制度のご紹介など、さまざまな課題に対応します。

## ■ 包括的・継続的ケアマネジメント

高齢者の皆さまの心身の状態やその変化に合わせて必要なサービスが適切に提供されるように、主治医、介護支援専門員との多種協働と、地域の関係機関と連携して、包括的・継続的に支援しています。



100周年イベント

## 倉田会ロゴマーク選定総選挙を開催

新たな法人ロゴマークが決まりました。

2022年4月に開催された倉田会ロゴマーク選定総選挙は、倉田康久理事長を選挙管理委員長として職員・関係者を対象に行われ、4つの候補の中から、本デザインが医療法人財団 倉田会の新たなロゴマークに決定しました。本デザインは、医療法人財団 倉田会の頭文字「K」をモチーフに、患者さまに寄り添い、医療法人財団 倉田会と関わる全ての皆さまと「ともにあゆむ」という想いが込められています。



医療法人財団 倉田会

## 第3章 アルバム2023 職員とともに



# 医療法人財団 倉田会 アルバム2023

100年目を迎えた、私たち医療法人財団 倉田会一同は、  
これからも、地域の皆さまの健康と快適な生活をサポートしていきます。



倉田栄子常務理事

倉田康久理事長

## くらた病院



診療部



事務部  
総務課、医療相談課

医療技術部 放射線科、検査科、薬剤科、栄養科





事務部 医事課



病棟 看護部 (看護・介護)



透析 看護部 (看護・介護)、臨床工学科

医療技術部 リハビリテーション科



外来 看護部 (看護)

病棟 看護部 (看護・介護)





医師、看護部(看護・介護)

### えいじんクリニック



医師、看護課、介護課

### しんど老人保健施設

看護部(介護)、庶務

介護課



看護部(看護・介護)、臨床工学部



事務部、臨床工学部



介護課



看護課、介護課





リハビリ課

介護課



看護課、介護課



介護課



看護課



居宅介護支援サービス

事務課、栄養課、地域連携課





倉田会メディカルサポートクリニック

医師、看護科、放射線科、検査科



総務課

しんど訪問看護ステーション



ACT課、健診事務課

巡回健診課



平塚市高齢者よろず相談センター 倉田会 (地域包括支援センター)





医療法人財団 倉田会 広報誌

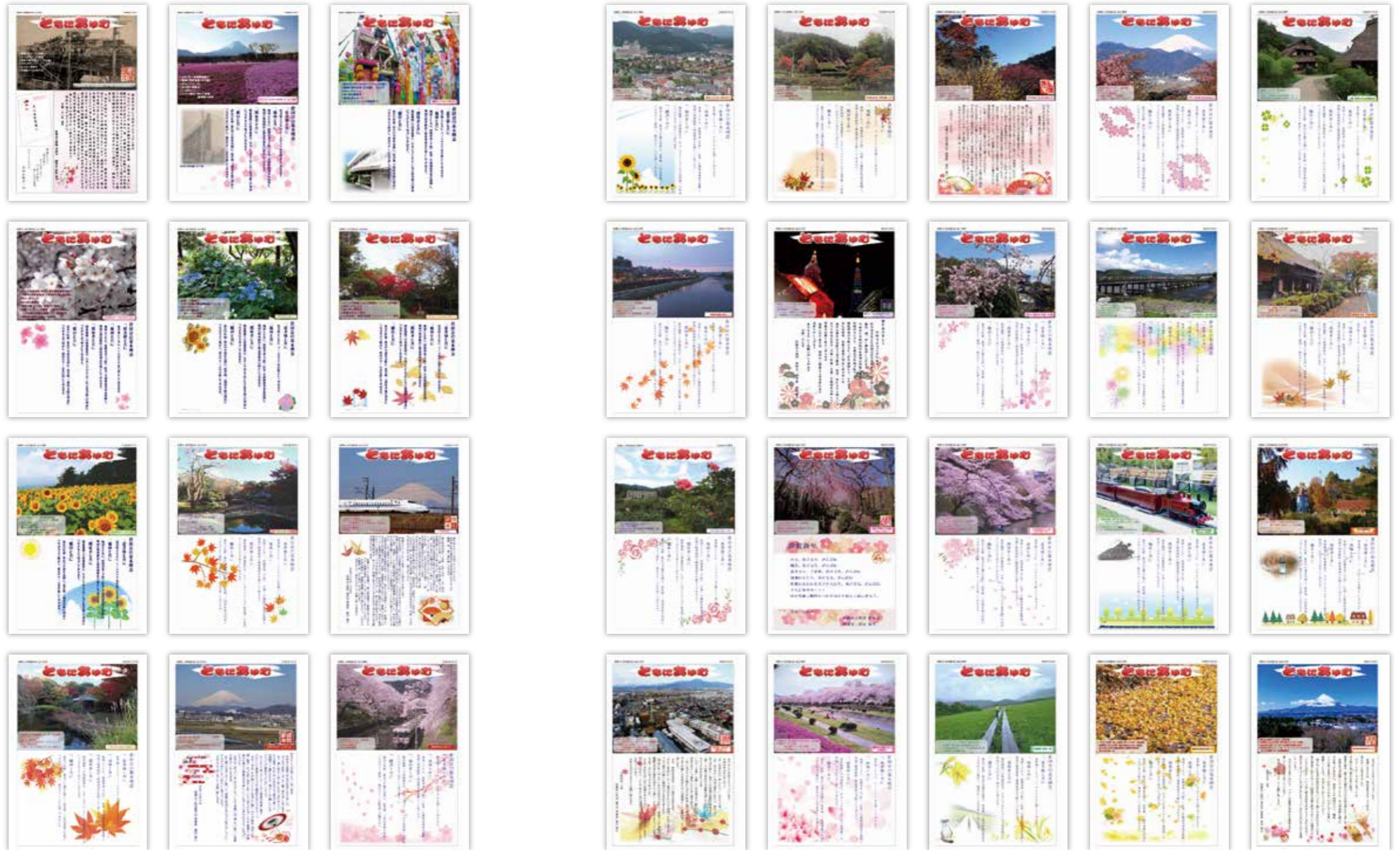
# ともにあゆむ

創刊から10年を突破しました。



2013年(平成25年)10月1日に創刊された広報誌「ともにあゆむ」は、地域の皆さまに、より良い医療、看護サービスを提供するための情報発信手段として始まり、より親しまれ、頼られる医療法人財団 倉田会をめざす事を目的として年4回発行しています。

創刊から11年目を迎えた本誌は、健康についての豆知識や皆さまからご投稿いただいた写真・絵画などを紹介する「ほのぼの展覧会」「我が家のいいね。自慢」、栄養士による旬の食材を使った「おもしろレシピ」など、健康に関するさまざまな情報を配信しています。



1923年 (大正12年)	倉田重隆が平塚町新宿 (現・明石町) に「倉田療院」を創立
1932年 (昭和7年)	療院建屋を新築、内科、外科、小児科に物療科が加わり、X線撮影装置を導入
1933年 (昭和8年)	創立10周年を迎え『創立10年記念誌』を発行
1940年 (昭和15年)	倉田重久が倉田療院第2代院長に就任
1945年 (昭和20年)	7月16日の平塚空襲により倉田療院が全焼
1946年 (昭和21年)	診療再開、倉田療院再建
1951年 (昭和26年)	9月 倉田療院本館上棟式
1953年 (昭和28年)	「医療法人財団 倉田会」設立、「倉田病院」に改称
1954年 (昭和29年)	結核病棟開設
1963年 (昭和38年)	4月 健康診断業務を開始 8月 救急告示医療機関となる
1967年 (昭和42年)	病院の新築拡張工事が完了、内科、外科、小児科、胃腸科、整形外科、放射線科を有する病院となる
1974年 (昭和49年)	倉田和久が倉田病院第3代院長に就任 特定医療法人を取得
1980年 (昭和55年)	二次応需病院として内科・外科同時引き受け
1981年 (昭和56年)	倉田病院管理棟竣工
1988年 (昭和63年)	5月 透析医療を開始

1996年 (平成8年)	7月 「しんど老人保健施設」を平塚市東真土に開設 10月 「しんど訪問看護ステーション」を平塚市東真土に開設
1999年 (平成11年)	8月 「倉田病院」を平塚市東真土に移転 名称を「くらた病院」に変更、急性期病床から療養型病床に転換 救急告示を辞退 「平塚中央クリニック」を平塚市明石町に開設 (旧倉田病院跡地)
2001年 (平成13年)	10月 平塚市東真土に「しんど在宅介護支援センター」開設
2002年 (平成14年)	倉田康久が倉田会理事長、くらた病院第4代院長に就任
2004年 (平成16年)	12月 「えいじんクリニック」を平塚市東真土に開設
2006年 (平成18年)	4月 「しんど在宅介護支援センター」を閉所 「平塚市高齢者よろず相談センター倉田会 (地域包括支援センター)」を平塚市東真土に開設
2008年 (平成20年)	9月 「倉田会メディカルサポートクリニック」を平塚市四之宮に開設
2010年 (平成22年)	4月 「平塚中央クリニック」を閉院
2017年 (平成29年)	4月 くらた病院西病棟の介護型療養病床30床を医療型療養病床に転換し全病床79床が医療型療養病床となる
2023年 (令和5年)	創立100周年を迎える

### 100周年を「ともにあゆむ」

医療法人財団 倉田会の創立100周年事業を2020年4月に仰せつかり、ゼロからの出発でした。最初に、記念事業の方向付けとして「ともにあゆむ」のもと「感謝」と「結束力」をテーマに起案を熟考しました。

100周年記念事業準備室の発足から1年の時を経て、本部に理念推進室「プロジェクトチーム ともにあゆむ」が発足し、新たな良き相棒を得て二人三脚で100年を振り返り、現在に至るまでの基礎となる資料収集から始まりました。

収集活動では、創業時の関東大震災や、昭和の大戦での平塚空襲による全焼で資料が少ないうえ、昨今の新型コロナウイルス感染症流行による、度々の行動制限による急激な環境変化にとても苦心しました。

当初は、1922年(大正11年)9月創立との周知が認識するところでしたが、取材や資料を整合するうちに1923年(大正12年)であることが判明しました。

2人で、100年前にタイムスリップして時代背景を考察しながら、一度もお目にかかったことのない歴代院長の人の繋がりを大切にされてこられた、人となりを垣間見ることができました。

創立月日まで判明には至りませんでした、「ともに考え、ともに創る」ことの楽しさを経験し、無事に発行できたことにホッと安堵するとともに感慨深いものがあります。

100年の歴史の重みを感じつつ「過去から現在の記録」の足跡には、激動の時代に翻弄され懸命に生き抜いた人の顔が見える、人の想いが感じとれる、とても読み応えのある物語に仕上がったと思います。

100周年記念誌は「故を温めて新しきを知る」…。これからの110年、150年を紡ぐ礎となれば幸いです。

次の100年への新たな物語は、始まったばかりです。人が歴史をつくる—まだ見ぬ未来、新たな想いをページに刻むのは、次の「ともにあゆむ」世代に託します。

当記念誌発行・編集にあたり、ご祝辞をはじめ、取材や資料提供にご尽力とご協力頂きました皆さまに心よりお礼申し上げます。

最後に、編集に携わり多くの方々との出会いと、ともに100年の時を刻む一員であれたことに感謝の想いを込めて、「ありがとうございました」。



医療法人財団 倉田会  
法人本部 理念推進室  
プロジェクトチーム ともにあゆむ  
大森 博一 田邊 裕子

医療法人財団 倉田会 創立100周年記念誌

## 倉田会100年の歩み

2023年(令和5年)4月 発行(非売品)

発行：医療法人財団 倉田会  
神奈川県平塚市東真土4丁目5番26号  
電話番号:0463-53-1955

企画・編集：医療法人財団 倉田会 法人本部 理念推進室

編集・制作：株式会社 日立ドキュメントソリューションズ

編集・制作協力：株式会社 エフビーアイ・コミュニケーションズ

印刷：株式会社 日立ドキュメントソリューションズ

●本書の無断複写・転載を禁ず